
名の無い彼と名無しの彼女

水口 秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名の無い彼と名無しの彼女

【Nコード】

N23190

【作者名】

水口 秋

【あらすじ】

彼と彼女とあなたと私とキミと僕の交差する悪質で醜悪で偽善で欺瞞に満ちた、満ち満ちている物語が始まる。

僕たちが認識している世界はどのくらい正しいのだろうか。

彼と私が知っている世界はどれくらいの実実を孕んでいるのだろうか。

ならば、知らないところで世界がどうなるうとも、誰もわからない。

人間が死んで生きて苦しんで楽しんで愉快で滑稽な様を描く、ファ

ンタジー。
世界を

××××のは一体ダレダ？

「プロローグ」と言ふ名の (前書き)

ぞうぞう、楽しんでいってください。

「プロローグ」と言う名の

「プロローグ」と言う名の悪意と善意と真実と虚言。

彼には名前が無い。

彼女は名無し。

始めから無かったのか、もしくは人生の途中で失ったのか、二人は知らない。

名前が無いのだから。

二人は強い糸で結ばれている。

一人ではけして断ち切ることでできない、「糸」に。

引っ張ることしかできないのだから。

二人は考える。

名の無い訳を。

じっくり、緩やかに流れる時の中で考える。

自分自身を。

二人で。

はじまり はじまり

「プロローグ」と言う名の滑稽で緻密で悪質で包括で虚しい物語。

世界が崩壊すると彼は言う。

世界が崩壊すると世界は言う。

世界が崩壊すると彼女は言う。

世界を崩壊させるとアナタは言う。

それならば、

私は世界を救って見せよう。

ハジマリ ハジマリ

「暑い」がもたらす人への影響は所詮、本人次第でしかない。

《無関係な夢》

僕は小学三年生だった。昔、小学校に張り出されたイベントの乗っている紙に「鷲を手に止めよう」といった企画があった。僕は勇気を振り絞ってそれに出てみた。

その時が一番父と仲が良かったと僕が思う当時の出来事だ。当時の僕はいわゆる世間一般的なチキン（弱虫）だった。当然、手に鷲を止まらず勇気も無かった。そして、ある肉食鳥を停まらせた。それは…驚でもなくトンビでもなく、身体の小さいハヤブサだった。それを後ろから見ていた父は僕にこう言った。

「やっぱり俺の息子だな。 は《チキン南蛮二号》だな」

その時はこの言葉の意味はさっぱり理解できなかった。褒められているのかも、貶されているのかさえの判断も。今振り返ると思う。やっぱり今でも分からぬよ。

だけど、僕はこう思う。その時の父の言葉の中には『愛情』が含まれていた……と。

《覚醒》

そして今覚醒した。そう、『俺』は十七歳の高校二年生であり、真夏のこの季節になぜか毛布を着て寝ていた血迷った学生の夢はこの時点ではもはや忘れ去られていた。そんなことよりも俺は身体を先ほどから何時間も蹂躪していた熱エネルギーから解放されるべく、身体をゴロゴロと転がし毛布から脱出した。

「ふぁ っ、汗かいたー」

俺はこの真夏日和の土曜日にわざわざ窓を閉め毛布と羽毛を着こ

み、寝た理由はこれ一つである。額から汗がにじみ出て、首から鎖骨にかけての肌は油のような触り午後血であり、長袖長ズボンのパジャマは自らの汗でべっとりつくついで、とても気持ちの悪い状態である。この状態を保ちつつ、朝から冷たいシャワーを浴びるのだ。理由はただこれだけ。

『たんに、気持ちいいから』

起きて部屋の出口の扉に手をかけて、一人…呟いた。

ツウーと冷たい水が身体を駆け巡り、今まで持っていた熱を殆ど持って行ってくれる。心臓の部分に手を持っていくと、異常な速度の心拍数を叩きだしている。冷水のシャワーは心臓から離れたところからかけなければ身体に悪いのだ。

身体を拭き、タンクトップとパンツを穿いてキッチンに行き、時計を見る。午前七時四十五分だった。我ながら結構早く起きたものだ。心の中で自画自賛を凶ってみる。ま、どうでもいいけど。冷蔵庫を開けて中身を確認する前に、冷蔵庫のオアシス的存在の冷気を顔に浴びせる。ふえー、気持ち良い。中には、昨日頂いた産みたて卵が三つあった。それと、奥には醤油。どうして冷やしているかは疑問だが…。卵三つを取って、戸棚からどんぶりを持って来て炊飯器の中の炊きたてのご飯を盛り、黄身だけをかけ、冷蔵庫から醤油を取り出して軽く味付けして一気にかきこんだ。朝からの卵かけご飯は想像を絶する腹への負担があったよう。今はトイレでウーコをしている。

全くもって真夏とは俺とは敵対したいようで、家のトイレは洋式であり、便座に座る。そして力み、八十パーセントが液状化した便を絞りだすのである。当然、時間は刻々と経過するので、便座とそれに接している皮膚は熱を持つ。そして用を足し、立ちあがるとどうだろうか。皮膚にはネットリと真夏の僕である汗が付着している

のである。これは俺が人間として正常に生きているからしかたのない現象なのだが、どうしても太陽を破壊したくなる。嫌々ながらの排便を済ませ、未だにムンとした熱を持った空気だまりの空間から解放されるべく、窓を開けた。確か暖かい空気は冷たい空気に向かつて流れるらしい。その理学的効果がこの真夏日和に感じられた。外気が凄く涼しい！

これは本日八月九日の事である。どうして俺がこんな事を長々と語っているかを説明すると、簡単に注釈するところなる。別に、近頃のファンタジーやSF的展開の主人公の奇抜な行動をとろうとしている訳じゃない。てか、そんな展開が俺の目の前に発生しても必ず見て見ぬふりをする確信と自信がある。で、話を戻すと俺は自分の自分自身の日常に満足していない。とかそんなトコだ。日々の生活に潤いと新鮮さを、がこの年の目標だった。

因むところで言うと、俺は一人暮らしで二階建ての一軒家を持っており、俺は二階の東側の部屋で寝ている。リビングは階段を下りて一階にあり、トイレも一階にある。

この二階は全くの無意味情報だから、無視していいです。どこ視点で言ってるのやら。

一階のリビングに行き、壁にかけてある時計を見る。八時二十分だった。我ながら驚いた。飯を食ってトイレに入ってウ　コ捻りだすだけで三十五分も無駄してしまった。恐らく、食事をする時間は五分程度だろう。残りの三十分はインザトイレだったようだ。道理で額が汗ばんでたんだ。

約束の時間にはもう少し時間があつた。一応胃薬飲んどこつ。まあ、俺の約束つてのは外出の事であつて、高校生活を満喫するための色恋沙汰では決していない。言うなれば高校入ったから渋々始めた感じの青春沙汰だった。

青春沙汰…なんてちよつと言い方がおかしいかもしれないな。けど、別に高校生活＝恋愛とならないように、青春＝部活なんて事も一概には結びつかない。つまりは…。

約束は九時だった。今は八時二十五分。約束の場所に行くまでに大体自転車で十五分行ったとこだ。自分の部屋に置いてあったスポーツバックにタオルと着替えと財布とスパイクを入れ、肩にかけてまたリビングに戻る。八時半だった。ここでハツと気づく。自分の格好。そーいや、タンクトップとパンツ（柄物）だったわ。これで外でたら速攻捕まるな。タンクトップとパンツで自転車で跨って高校二年生を想像してみる。…公然猥褻ってるなこりゃ。

「半そで…と、半パンっ」とー」

空ぶりの独り言を呟いて自分の部屋のクローゼットを開けて衣服を漁る。お目当ての服は速攻で見つかったから、そそくさと着替える。あ、忘れてた。長いジャージ入れるの。これがなきゃアツプできないっしょ。時計は…八時三十五分。五分前行動を心がけたいから今から出るか。玄関に置いてあるアツプシューズを穿き、玄関の扉に手を掛ける。

…絶対熱いんだろうな、外。外気に触れた瞬間俺溶けちゃうよキツト。だってドアの取っ手握ってるだけでも熱いもん。もう靴に突っ込んでる足が微かに汗ばんでるし！外の空気に触れた瞬間俺指先からザザって感じで溶けちゃうよ多分！脳味噌も零れ落ちちゃうよっ。

とか何とか自分で自分に言い訳を作っって言い聞かせてみたけど、約束破るわけにはいかないよな。ガチャリと取っ手を下し、ドアを勢いよく開ける。

「いつてきまーす！」

俺以外誰もいない家にあいさつして大きく一歩踏み出す。あ、鍵するの忘れた。カギカギっと。ぎゃおーですよいやマジで。ジンジンする日光が皮膚をちくちくと刺し、辺り一帯に生息している蝉がミンミンと五月蠅く空気を振動させる。うるせーよ、家から虫取り網と殺虫剤持っ来て始末するぞお前ら。それが嫌だったらさっさと鳴き止め。って、俺の心の声は通じないのだが…。

「っーかあちーっつの」

熱々の空気を振りほどきつつ、車庫に置いてある自転車をとりに行く。普通に売ってるママチャリなのだが、ボディはクリアな青で、どっしりと自転車に腰をつけ、漕ぎ出す。もう日が出て何時間も経ってるから大気は加熱されて、地面のアスファルトには熱が染み付いて地面数十センチに熱い空気の間を作ってる。こういう時だけ田舎の方がいいと思う都合のいい思考を持っている俺十七歳。あー、アイス食べてー。

「極限」の中で人間という下等生物が行える行動パターンはどれほど少ないのだ

《接触》

そんな無粋な事を頭の中で十五分間ループさせつつ、目的地に到着する。目的地は競輪兼陸上グラウンドのドームである。地下と地上があり、三階に分けて陸上のトラックがある。競輪は二階の一番上の階のトラックの周りで練習するようだ。トラック自体は斜めっており、本格的って感じた。二階は空が見えるトラック。一階は入り口から入ってすぐ近くにあるトラック。地下は、入口のすぐ近くにある地下への階段を通って入る。トラックの大きさから言えば、2<3<1って所だろう。一階と地下は雨の日に大体使う。当然芝や砲丸投げのスペースはなく、トラック競技オンリーって感じた。今日は二階に用がある。腕に巻いた時計を見ると…八時五十五分だった。定刻の五分前。

ドームの近くの自転車置き場にせつせと自転車を置き、入り口前で待つ。

「うあつはー、なかなか早く来てるねー」

髪を後ろで縛ってポニーテールにしている黒髪色白美少女カッコ自称が顔を火照らせ、マウンテンバイクに跨り、風を斬りつつ俺の目の前に現れる。家から全速力で漕いできたらしく、汗ボツタボタだ。汗が頬を伝って顎から落ちてる。汗が日光に当たり光って綺麗だと思うけど…現実を直視すると気持ち悪っ。

「…今、あたしの事バカにしたでしょ？」

まさに名探偵と言っても過言ではない洞察力だった。流石は俺の幼馴染らしい。俺の事を良く分かってらっしゃる。

「うん。全く持ってその通りであるね。お前は直感で生きているよ
うな女だからな」

「何気に酷い事言うねキミ。さっさと練習しようよ」

美少女は俺との話を早々に切り上げ、自転車置き場にMTBを駐車し、駆け足で俺のところまで来て、俺達は歩き出す。

美少女はハーフパンツに半袖と、俺と同じ出で立ちで半袖の胸のあたりが汗ばんで、少し透け透けになっている。淡い青のブラジャーだった。俺としては青はいただけせんなー。ここは白を俄然押したいと誇張します。っと、危ない。目線がギリギリで欲情してしまいますよ。美少女の痼センサーに引っかかったら一貫の終わり。終わりの始まり。変態扱いされますよ。っと、また視線が…

「キミ、気になるの？」

「何をどこを？」

「ふふっ、なんでもないよ」

「お前も変な事言ってるで、さっさと入ろうぜ」

入口に券売機があるので百円玉を三枚投入し、「高校生」のボタンを人差し指で押す。入場券がガチャリと排出される。美少女も同じ事をし、ドームに入る。一階に入るにはドアをくぐらなければならぬ。ドアは東西南北に一つずつあって、ドアには入場券の認証口が設置されている。俺らはそれに入場券をかざして、ピピと音が生ると長方形のドアの鍵がガチャリと開き、少し力を入れて押し、ぎぎぎーと、特有の金属のこすれる音を立てながらドアは開き、暗い一階のグラウンドが目の中に飛び込んでくる。目は明るく殺人光線の降り注いでいた外から暗く暗殺出来るんじゃない？ 的世界な中に入ると、目がスィバスイバして殆ど見えない。即座に二階への階段をさがし、脱出しなければ！

「こつちよ。キミはあたしと何回来てるの？少しは内部構造覚えなさいー」

どうやら俺がウロウロしているのが気に入らないらしく、パシッと手をとって歩き出した。うん。女の子の手だ。プにプにだー。

「ぎぎゃああ

「！！！！！！！！！！」

別に殺人事件とか起こってないから。後ろから刺されたりとかしてないから。ジェイソンとか出てこないから。

「キミは日々大袈裟すぎなんだよっ。傍にいるこっちが恥ずかしいからやめてよ」

「ごめす。でもほらっ、日の光に当たったら灰に成るんだよ」

「はいはい」

「ソレって合わせてくれたの？」

「……………」

「……っいついやってしまったようだすね。俺に釣られた様子だな。こりゃー。」

二階へあがると、太陽が今の位置か六百キロほど近づいたかの暑さがミクロの槍となってブスブスと刺さってくる。けど…、この景色にはやっぱりこの暑さだよな。この暑さに拍車を掛けるように、てか拍車を何乗もするかのように俺の足元には真っ赤なターバンが敷き詰められている。見ていただけで網膜が焼けてくるうー。少し意味が違うけど。

そこは燦々と日光が降り注ぐ中、グラウンドを走ったりする同じ青色のジャージを穿いている中学生の陸上部、ダウンをしている高校生陸上部が内側の芝生の上でストレッチしたり、リレーをしたりする別の高校生の陸上部、幅跳びで砂を散らしたりする一般の方々そのた諸々の光景が目に入ってきた。およそ二十バイト。俺的要領はこの程度。Kキロにさえなれない景色だ。

あー、氷河期に突入してもいいから太陽壊れてくださいませんか？……………あ、ムリ。それはそれはサーセン。

「よっ！今来たのか？」

太陽に向いて悪態を付いていると、長身で短身でがりがりムチムチ骨ばって筋肉質で色白で色黒で坊主頭でロン毛の人間が俺の方へ歩きながら話しかけて来る。因みに、あまりこいつの事を考えたくないからこういう脳内イメージを作り上げているだけで実際はどうだろう。俺は人間を真っ直ぐ見詰める事は出来ないからね。

「お前は暇な人だな。俺みたいな非常識人をここ最近ずっと待つて…どうしたんだろ」

「一々癪に障る言い方だ。ま、それでこそ張り合い甲斐があるってもんだ。跳ぶ時呼んでくれ」

ほえー。会話が成立しちやったよ。

「あらら。自分より格下で年下だと思っていた人間に十センチも負けてた陸上青年じゃないですか。それが掛ける三回」

完結した物語に茶々を入れてくれるなよ美少女。何年も寝かして埃を沈殿させた高級ワインを開ける瞬間に横から無理やりぶんどうられて、振られまくって、今までのワインを焦がれていた時間を棒に振った様な気分だ。

「お前…、それは言い過ぎだぞ。それが精一杯のジャンプだったんだからあまり追求するのはむごいぞ」

「すまんのーキミ。迷惑掛けて」

「いえいえ、お気になさらず」

喜劇を演じてみる。年老いたじーさんばーさんの演技。たった二回の往復会話。それでも、俺達二人の罵倒でキレたのかは分からないが、陸上青年は大きな声で言う。

「ぜってー勝つつ！首を洗って待っとけ！」

鼻息荒くして子供っぽい事をいけしゃーしゃーと言うなー。じゃー今から池へ行って首でも洗おうかなー。

「お前が変なこと言うからだぞー。あのまま上手く完結させておけばよかったのに」

「キミは生ぬるいんだよ。きっぱりと言わないとこれからの人生生き抜いていけないぞ」

右目をパチリと瞑り、変なポーズで俺に言う。瞑った右目から小惑星が飛んでるぞ

「んじゃま、そうゆう事で」

「ああ、俺は勝つからな」

「じゃ、そゆ事でー」

どうなったか知らないが、脳が機能しなくなつて、目の前が歪んで、嘔吐感が胃から込み上げて来て、ドシヤリと今日朝食べた多量の卵かけご飯が真つ赤なターバンの上に真つ黄色な染みを作った

はしなかった。

「キミ…、こつゆうの見ても大丈夫なんの？」

ああ、後ろにいたんだ美少女。無言で顔色を見ると、いつもと変わらない表情だった。

「頭のフィルターでシャットアウトできるから大丈夫。で、これは何事？」

「あたしは分からないよ。どう考えても上顎から上が無いってだけで…」

どしやりっ

頭と言う名のアクセサリを失つて、ついでに重心まで失つた身体が地面にドンッと受身を取れず正面から無防備に倒れる。手を付きなさい、手を。言っても聞かないだろうけど。

頭が地面にぶつかった衝撃で頭から出ている鮮血が激しく飛び散つてジャージに染みを作る。ジャージに不吉な黒点が出来る。

「…っただけで…後は……………」

美少女は言葉を紡げなくなり、虚空の時間がただただダラーッと流れます。水 血も滴る良い男？になってますよ。お悔やみ申しあげます。そこで、その時、周りが異常に静かになっている事に気づく。初めはコレが周りにも見えて、それで動きが止まって静かなのだろうと思っていた。死体に目を向けている間は。死体に穴が出来るほど凝視していた間は。だが、ソレは、t

「キミツ！周り！あたし達以外、全員死んでる！」

その台詞で周りを見渡す。見透す。見通す。見徹す。

エム エイ ケイ ケイ エイ m a k k a

マツカ まっか 変換しましょう。 真つ赤。

自分で言っていて何だったのだが、アリエナイって単語はこの状況にはあまりそぐわないと思う。アリエナイ事がアリエテいるのだから、これはもはや事実真実として受け取らなければいけない。であるのだから、ここは事実を受け止めた上での更なる言葉を紡ぐための言葉が必要だと思う。つまり、ソレは「どうしてなのかな」である。

「人の台詞を強盗するなよお前」

「え、あたし何か悪いことしたの？」

「いやー、自己完結したのもうよいです」

「二十八体の死体、いや、これを合わせると二十九体なのかな。どう思う？」

美少女は俺の足元に転がっている陸上青年をチラリと見て修正する。それが上方修正か下方修正かは分からないけど。

俺達は別に逃げ惑う事や、困惑することなく、虎視眈眈とこの事実を直視し、更には探偵ごっこまではじめてしまった。

「一つだけ言えることがある」

決め顔で言ってみた。

「ソレは何？」

美少女も下唇を親指で撫でながら（考えているポーズ）カッコいいヒロイン的立場の人間風に聞き返す。

「俺達には関係ないって事っ！」

「そっだね」

ハッキリと言い切るとそこで会話は打ち切られた。

おやおや、万を持って犯人登場。

の予感！？

「日常」を日々の生活で実感している人は世界中で一体どのくらいいるのだろ

《接触・参》

香川県

うどんが特産の日本一を争う程の小規模の県であり、四国の四つの県の一角。そこは結構な山が存在しており、ある山の一角の斜面に赤血監理と苛納柁維佑は立っていた。

「何ゆえ私を追うんだ」

少し離れた距離の人外と思えるような形が言う。その人外は、アイルランドの神話の妖精だろうか。生まれたての赤子の様な色の肌をし、身体にはオオカミみたいな毛が薄く生えており、手足は大きい。そして、手に持っているものは両刃の剣。レイピアほど細くなく、両手で持つほど大きくも無い。片手で持てる程度の丁度良い大きさの両刃剣、だった。

「レヴェルイーター」バンジー、お前を生かしてはおけない」

維佑は言う。

「この香川の地でお前は五人もの赤子を殺している。もはやこれは殺戮に近いよ」

監理は言う。

「私は死を叫んだだけだ。云わば『呼声』を放っただけ。まあ、呼声は命の灯火が弱い者に対しては命を奪う声になるがね」

バンジーは全く悪びれもせず流暢に喋る。顔は結構な美人少女であり黒髪のロングなのだが、声が異常なまでに顔にあってなく、老人の男の声だった。隣に生えてある一本の樹の幹の表面を左手で触れ、メシリと掴む。驚嘆が生まれる。樹の幹に指が減り込んでいる。驚異の握力だ。

「そんな握力を持っているならそこらの犯罪者を見つけてメキリと首を折ったら治安の維持に貢献できるのに」

維佑は腰に巻いているベルトから肉厚のファイティングナイフを

一本抜き、みの入っていない会話をする。当然、顔はバンジーを見据えている。

「ま、ソレはそれでいけない事だから狩るけどね」

藍理は腰の両脇に据えている忍刀を鞘からシャリンと抜く。殺気を軽く放ちながら、こちらもみの入ってない会話をする。当然、顔はバンジーを見据えている。二人とも狩る気満々のようで、姿勢は腰を低くし、背を軽く丸めて、膝の関節を曲げ、バネを溜めこみ地面の土を蹴って、同時に走り出す。百メートルの世界記録保持者の速さを軽々しく超える程の速さで離れている距離を一瞬にして縮める。まるで四駆のバイクで砂浜を疾走したかのように、二人の背後からは土埃が舞っている。対するバンジーも、二人の俊足と言っても過言ではない早い一連の動作に反応し、右手に持っている両刃剣に左手を添え、即座に次の行動に移れるような守りの迎え撃つ体勢を取っている。

「はあああああ

維佑は怒気を放ちつつ、あとバンジーまで五歩の距離で右足を強く地面に踏み込み、五歩を一歩に縮めた。つまりソレはもはや人間業ではなく、恐ろしい早さである。一步一步踏み出す速さを超え、飛ぶようにバンジーの懐に入り込む。が、バンジーは守りの迎え撃つ構えを取っており、維佑の行動を先読みしたバンジーは両刃剣を握っている右手を逆手に持ち替え、左手で刀の刀身を押し、地面に向けて、維佑の走り込んで来るタイミングを見据えて、振り放つ、両刃剣の刀身は沈むような青で染まっており、振り下ろされる剣に付いていくように青色の残像を刀身の背後に付けていた。そしてその剣は懐に入っつてこようとしている維佑の首をタイミングよく捉え、早々に首に向かって進んでいく。維佑　は死ん

「　　つ、やb　　」

ギイイン　　ババババツと両刃剣から大量の火花がふわりと飛び散った。ソレは時間を止めて見てみると一目瞭然のだが、あまりに一瞬の事なので肉眼でその瞬間を捕獲することは難しい。ソレ

は、藍理が両手に持っている忍刀で両刃剣を止めて、次の瞬間弾き、藍理は離脱した結果だった。そして次の瞬間、懐がから空気で無防備になっているバンジーに無情に維佑は右手で握りしめたファイティングナイフを下方方向から薙ぎ払った。

「ぐううあううううううううううううううううううううううあああああああああああああああ
あああああああ　　！」

ナイフの刀身はもちろん、柄の部分までずぶりと入り、その身体を深く抉り去った。大動脈などがあるのかは分からないが、赤い色の鮮血らしきものが吹き出た。だが、その液体が大地に染みを付けることは無かった。触れる直前で蒸発、もしくは消失したのだ。胸を一閃に抉られたバンジーは激痛に呻きつつ、維佑たちに背を向けて、一目散に逃げ出した。逃げる途中に激痛で離してしまった両刃剣を回収し、山を下る。

「これは…面倒な事になりそうな予感っ」
維佑は頬をヒクツかしながら、藍理とバンジーを追いかけ、山を下った。

《進ミ化ケル》

二人はバンジーを追いかけていた。群青色の葉を虎視眈々と、生命の息吹を感じさせるように生やしている木々の間を二人は抜けつつ、バンジーを追う。百メートルを数秒で駆け抜けるほどの脚力を持つ彼らからすれば、山を降りることなどは一分もかからないのだが。山を降りたバンジーは、傷口から体液を漏放させながら、民家の屋根から屋根に飛び移っている。脚力が異常発達しているようで、民家の瓦は破片を散らして壊れていく。二人は無傷、対して相手は手負い。二人は少々油断していた。だから　　殺された。

命を吸収する叫び声『呼声』を少々見くびってしまったよう

だった。全力の叫び声『呼声』の灯火の炎が大きい人間の命も奪うと。二人は追跡途中にソレをくらい、昏倒し、バンジーの超強力な握力で殴られ、殺されたのだ。そして、死体と化した二人の肉片を喰った。喰らった。肉一片、血一滴残さずに、全て食した。体内に入れたのだ。

そして、バンジーは進化した。

いや、昇華が正解なのだろうか。レヴェルイーターの名の所以は喰らって成長するところにある。普通のイーターは生涯に一体食うか食わないか程度なのだが、バンジーは一気に二体食べた。驚異の成長を遂げたバンジーは、肉体的成長に精神が追いついていかず、只只、喰らうだけの存在になってしまった。

《追撃》

維祐と監理は悪態を吐いていた。

「クソッ！取り逃がしたッ！あいつら 邪魔しやがってっ！」

「そう取り乱さないで、まだ 視えているから」

監理の目にはどうやらバンジーが視えているようだ。だが、その瞳は驚きの色を示している。

「進化：してるよ、バンジー」

「なんだって！？面倒な事してくれやがって、あいつら！」

「どうする？」

「追う。追うしかない。追うしか：今はな」

彼らは手負いのバンジーを追って山の斜面を駆け降りていた。山の緑が薄くなっけいき、民家がだんだん見えだした頃、バンジーは思いつきり斜面を跳躍して近くにあった民家の屋根に飛び降りた。そこまで追いかけていた。だが、飛ぶ瞬間に何者かが邪魔をした。黄色と赤色のマフラーが特徴的な二人の彼らと同じ、《レヴェルイ

「ター」を狩る存在に。

「ここから先は　あたしたちが代わってあげるわよっ、できそこないの二人組!!」

「ふんっ!」

男と女の二人組　通称「直立型抹殺人外兵機」と呼ばれている二人組に。

そして　維祐と藍理は二人に横から衝撃を与えられ　斜面に転がった。当然、ものすごいスピードで駆けていたのだから、転がった時の衝撃はとてつもないものだったのだろう。

そして　今に至る。

維祐と藍理は山の斜面から街を　民家の密集を見渡す。いや感じているのだ、レヴェルイーターの存在を。

「いやな感じはまだそう遠くからはしないな。そっち、距離解るか?」

「いや、流石にそこまでは分からないけど……位置は特定できたよ。Let's are you?」

彼は彼女の問いに答える。バンジーを追うと心に誓いを立てて。

「Yes, let's!!」

ここから始まる　彼らの追撃が、そう　《仏人》の狩りが……始まる。

「人外」とは何も人以外のものを指す言葉ではない。倫理観の無い人間を価値観

《光ト》

大量殺戮（？）が行われた陸上兼競輪のグランドでは一人と男と一人の女が真つ直ぐに出入り口を見ていた。まるでその視線はカーテンから覗く若い女性の着替えシーンを凝視するような真剣さを含んでおり、だが、動機は全く違った。

そこにはいつの間にか、
いつの間にか、

一人の女の子がたたずんでいた。

その姿はこの状況において 異様、異常、意外、異質、異形。

様々な意味を孕むその少女は 彼らを見てにやりと笑った。そして、トコトコと擬音が付きそうな純粹無垢な歩き方で彼らの前まで行き、どうすればいいのか戸惑っている彼らの手を取り、元来た道

つまりは出入り口までの軌跡を紡ぐように歩きだした。

「ねえキミ、これはついて行っていいものかね？」

「俺は幼女には興味ないから知らん」

彼はあからさまに適当でどうでもいい対応をした。明らかな差別だった。キャラが変わっていた。いや、この場合は普通なのだと安心するべきなのだろうか。もし、この状況で彼が「当然だ、なぜならこの世界は幼女のためにあるからな」なんて言えば、彼女は昇天しかねないだろう。どうやら、彼女も彼の心の内を察したらしく、一度ニコツと笑って女の子の足並みに歩幅をそろえた。

そうして、彼、彼女は女の子とともに扉をくぐった。ただし、その扉の向こうは暗いといった性質は存在していなかった。その逆、明るいという性質のみが存在していた。こんな事はまずあり得ない、この時初めて彼らは自らの置かれている状況を理解するのであった。

彼女がどれだけ異質であるという事とも

。

「バランス」感覚はもともと人間に備わっているもの。

維祐と監理は追いかけていた。進化してしまったバンジーを。

「クソツ！ただの雑魚だったのに《アドバンス》に成長させやがってっ！」

「うん、この展開は予想外だったよね」

二人は狼狽していた。二人はバンジーを追っている途中だ。だが、その途中で様々なものを見てしまう。

否 感じてしまう。

民家の密集区にはある異質が充満していた。その正体とは「死」だった。

「あいつは呼声を使いまくって魂をくらい続けている、それでいいんだよな？」

「うん、一応は」

魂を抜かれた人間とは、残酷なものだ。

骨格を壊された人間、脳を破壊された人間、心臓を潰された人間、そんなものよりもっと。

骨格、脳、心臓を肉体または身体と定義すると魂はそれに宿る精神である。

肉体・身体は部品でしかなく、それに魂が搭乗することによって完全な人間が出来上がる。

人間が死ぬには肉体に致命傷を負わせることが必要だ。だが、厳密に、緻密に言くと、それは完全な死ではない。肉体が死んでも、宿っている魂には何ら傷はつかない。

仏教の考え方で輪廻転生というものがある。

肉体は死んでも魂が生きているのなら来世に転生が可能であるというものだ。

踏まえて、魂の無い肉体は、とてもまずいことになる。

肉体は死、魂は存在するならいいが、肉体は生き、魂が存在しないなら、その先に待っているのは、
世界のバランスの崩壊でしかない。

人の魂が一定に保たれていると仮定すれば、
崩壊しかない。

一人や二人ならいいが、こう多人数になるとかなりやばい。
だから、

「監理、急ぐぞっ！」

「なんなりとっ！」

仏人は火急の勢いでバンジーの元へと急ぐ。

彼らを通った後には、一陣の風しか残らなかった。

「少女」につける単語としたらやっぱり過去現在未来全て見てもやはり××しか

《世界ノ》

ビイーンとブルーグレイの空を彼女は滑空する。雲は黄土色で彼女が雲を通過するとボフンツと穴が開く。時速100kmの飛行は周りの音を完全に置き去りにし、自分だけの音の世界を作り出す。いくつもの大陸と大陸を横断し、正方形の形をした、島全体が全て緑に覆われている島に着地する。

否、着弾した。

ズドンツ！ とか、 ドオン！ とか、その程度の軽音は鳴ることではなく、その島全体に酷いくらいの振動をもたらした。つまり、着弾の衝撃で島全体が 揺れた。

海岸に着地した彼女はもうもうと群がる赤褐色の砂煙を箒で一閃し、あたり一面の砂煙を一瞬で吹き飛ばす。

「もぉー、なーにが大丈夫よツ！全然だめじゃないツ！私の学院での滑空魔法の成績知ってるでしょツ！？ツたくー、酷い目にあつたわッ！」

砂埃を蹴散らした彼女は 辺りを見渡す。そして気付く。自分が 何をしてしまったのかに。

島は海岸に50%占められている。その20%を彼女は一瞬で吹き飛ばしたのだ。つまり、彼女の周りには月面の如く痛々しい隕石の衝突のようなクレーターができていた。

だから、彼女は命の危機にさらされていた。地震とは少し違うが、海に逆向きのエネルギーを加えると、当然その逆向きとは逆向きのベクトルで同じほどのエネルギーが跳ね返ってくる。そして、クレーターができるほどのエネルギーが海に伝わったとすれば、どれほど大きな津波が押し寄せてくるのだろうか。

『Magical 11-03-60』と書かれており、その下には『Claire』と黄色の糸で彫られていた。

『魔術アルカナフィンディ学院 第11年 第03組 第60番 クレア』

それが、彼女の所属と名前だった。

「目的」のためには手段を選ばないとよく言っが、最終的には手段選んでるじや

《目的》

「うー、最悪だあー」

彼女 クレアは島全体に響くほど大きな音で叫んだ。

彼女の周りの砂はいろいろなもの余波で波紋状に削り取られ、まるで月面を思わせる。

「そっいえば、あなたは滑空魔法は苦手だったわね、あーいや、赤^ト点^ベだったっけ？」

彼女が空を仰いで叫んだその後、彼女の顔を影が曇らせる。

彼女の滑空魔法とは打って変わり、優雅に

その姿はまるで鷹や鳶、トンビなどの猛禽類を思わせるモノで、円を空に描きながらフワリと無風の、まったく回りに風を、吹かせること無く、着陸した。

「意地が悪すぎよッ ナオッ!!」

クレアは見事な着陸を見せつけてくれた彼女 ナオと呼ばれた少女に吼えた。

「あーら、このテルシャッナオッフリーフィになんて言い草。私はただ、『一般的にこなせる生徒は普通に大丈夫』と言っただけよ。」
ふー、と溜息とはまた違う意味での 相手を馬鹿にするような息を吐き、島の中心部
、
そう、

中央に只、存在するだけの遺跡

を向いた。

「本当に行く気なのね、クレア」

彼女は真剣な眼差し、と言っても、彼女は幼げな顔つきなのであま

り真剣さを帯びないのだが、

「当然ッ！あたしは魔女なんだから　世界に混沌を招かなくちゃならないの。だから」

そしてナオが言葉をつなく。
儂げに、

錆びて拘束することができない鎖のように、
身動きの取れないクモの巣にひっかかった蝶を哀れと見下ろすような眼差しで、

「この世界を破壊する

のね。」

世界の　破壊。

世界の定義さえはつきりとしていないのに、

世界の　破壊、

を望む魔女。彼女の瞳には希望と切望しか無い。

「まあ、流石は《異型》と詠われた魔女の家系の第二十三代目当主

『クロエⅡAⅡシュヴァリエ』よね」

ナオは言う。

中傷を込めた台詞をクリアに冷たく吐きかける。

彼女の瞳には憎しみと　愛がこもっている。

「あらー、お褒めにあずからなくて光栄だよ。まー、無駄話をして
いる時間はないから私はもう行くからねッ！ここまでついてきてく
れてありがとう　と、言うておくよッ」

クリアはそう言いつつ、ナオに背を向け、手を頭の横辺りでぶらぶらと挨拶代わりに振って立ち去った。

のだが、

「あらー、知らなかったの？私も一緒に同行するのよ？」

「フえ！？」

波の音と潮風の音と、木々草花が揺れる音と、動物の鳴き声と、ネオとクレアしか音を出す存在が無いこの島で、余りにも素っ頓狂な　可愛いと表現出来る範疇の声を、クレアがあげた。

《遺跡》

そして彼女達は進む。

海岸との境界を作り、島全体を覆う森に入る。

島の中央には遺跡。

いや、この場合は少し違う。

遺跡自体は島全体を指す。何故か、遺跡が島と融合しているからだ。神秘的　とは言い難く、かといって　不思議とも言えない。

この空間では至極当然の様だ。

「魔女　ルールフォータスの遺産、ね」

クレアが呟く。

彼女たちは今、遺跡の入り口の前に立っている。

地面から生えている遺跡と言う建造物はさほど大きくは無い。

サテライトの様なごつごつとしておど色と薄い金色の円錐。

そしてその円柱の一端には入り口とそれに続く階段。

入り口の左右にはニメートルはある金剛力士像のような石造が。

それが遺跡だった。

「それにしても面倒な魔法陣よ、コレは。特に連鎖式なのがイタイわね」

フォールフォース
「崩魔壊陣の二つ名だけはあるよッ、ナオ」

「うるさいわ、ちよっと黙ってて」

ナオは今、遺跡の入り口付近に存在する、地面から生えている一本の純金で、先には大きな水晶のついた杖に手を置いている。

魔法陣　それは魔法を扱ううえで重要なモノ。

魔法を創造する　陣。

魔法を制御する　陣。

魔法を発動する　陣。

魔法を終了する　陣。

魔法を変化させる　陣。

魔法を崩壊させる　陣。

そして、この場合の魔法陣は、

魔法で防衛する　陣。

ディフェンスフォーメーション
防御魔法陣

この魔法陣は魔方阵としての本質にとってもよく近い。
本来、魔法陣は、魔法を扱う術者の安全マージンとして作られたもの。

今のこの世界での魔法陣は何らかの変化により、本質よりはずれて魔法を御するものとなり替わっている。

陣には三つの構成がある。

一つ目は陣を守る陣。

二つ目は術者を守る陣。

三つ目は陣を打破しようとする相手を破壊する陣。

これらの要素を含む陣を

「出来たっ！これで　突破、だっ！」

ナオの明るい達成感のこもった声。

手で掴んでいた水晶にピシリと一筋の亀裂が入る。

一筋だが、完全に二分する、断破の亀裂。

そして、水晶とその杖の周りに何重もの赤の魔法陣が出現して、
パリンッ！ と霧散して光の破片となりかき消えた。

対 防御魔法陣用 魔法、霧散殺陣^{デイスパース}

そして 遺跡への扉が開いた。

彼らの復活とともに。

「家族」を恨んでいる人間はただの屑。

《死ト志》

ディフェンスフォーメーション
防御魔法陣を彼女

ナオは破った。

魔女 ルールフォータスの、『だれも解けなかった魔法陣』を打ち破って。

魔女、ルールフォータスは魔女の中の魔女であり、混沌の根源。世界を三回崩壊させた魔女。

そして 世界に《死》の楔を打ち込んだ魔女である。

どうして、学生であるナオに魔法陣が解けて、そもそもこの遺跡の存在は知られていなかったのか。

答えは簡単明快単純解答。

ナオはルールフォータスの末裔だからだ。

テルシャ⇕ルールフォータス⇕フリーフィとテルシャ⇕ナオ⇕フリーフィ。

ルールフォータスが残した一つの遺産。いや、遺品の血統と言う名の。

そして、もう一つの遺品は知恵。知識。

そして、三つ目が魔法と魔力。

そして、この魔法陣。

だが、今、その全てが、

失われた。

え、何勝手に死んでるの？

ねえ、ねえッ！

心では悲痛な叫びをいくらでも上げれる。

でも、口で、喉で、音が出せない。

しゃべれない。動け 動け、口。

空気を振動させて音を伝えろッ！

だめだ、できない。

どうして、

友人が死んだのに。

まず、眉から上がスパンと切断された。

次に首。

右肩、左肩、右足、左足、胸、へそ、が切断されて、細切れに、

なつた。

断面が、きれいすぎる。

真新しい鮮血が吹き出ている。

何ッアレ。

目の前には、へそから切断されて内容物が出た友人が。

小腸が素敵にだらけて外に外出している。

大腸の一部が切れて、く、糞が散って、

胃が、見える。

思わず濁流が逆流して喉に押し寄せてくる。

ゴックン

酸い胃液を無理に飲み込む。

喉のあたりがもやもやする。

血が染み出てる。

ぶあしゅんっ

一つ、『友達のモノ』が減った。

足元にあつた脳味噌。

あれが爆発した。

無数の破片が私に降りかかる。

脳がグチャグチャとして、思考できない。
クレアは人生に絶望した。

.....

十分後、

彼女は立っていた。

ナオの肉片の向こう側に。

向かいの地面には吐いた跡がある。

「バイバイ、ナオ。今までありがとう」

クレアは決断した。

ナオの死を受け入れて、乗り越えた。

いや、許容した。

自らの許容量キャパシティーの中に無理やり当てはめて。

彼女は歩きだす。

その顔はもう、苦痛に歪んではいなかった。

だが、幾重の涙の跡があった。

だが、今は泣いていない。

その歩には一つの確固たる信念が込められている。

絶望はした。

一度でいい。

絶望はした。

二度はいい。

これ以上のことはもうない。

だから、歩く。

「あ、そうだったねッ、Happy birthday Nao.

」

今日はナオの誕生日だった。

もう彼女は振り返らない。

「デオキシリボ核酸」の略はDNA。でも日本語訳ならDRK。英語なら

《崩壊スル世界》

防御魔方阵は連鎖式の魔法陣だった。

魔方阵は三つの要素で構成されている。

そしてその三つ目。

『三つ目は陣を打破しようとする相手を破壊する陣』

それが魔法陣に組み込まれていた。

組み込まれているというよりかは、もう一つの存在として裏で独立していたのだ。

ナオが表と表現できる大きい印象を与える連鎖式魔法陣に神経を集中させて破壊したところで、

裏で独立していた魔法陣が発動。

それは相手を破壊する魔方阵であり、

対象はナオ。

おそらく力の根源は入り口に立つ二体の像。

あの二つの存在から魔力が陣に注がれて

ナオに魔法が発動し

た。

そして、その裏の魔法陣も連鎖式だった。

いくなれば多重型魔法陣。

開けて仰天パンドラの箱。

箱の最後には何が残っているのか分からないけど、辿り着く前に死んじゃいますよ。

というわけだ。

「これに気付けなかったナオはルールフォータスのような魔女にはなれなかったわけね」

彼女 クレアは先ほどまでナオが触れていた水晶に触れている。

水晶 コレは魔水晶という代物だが、こういった類のモノには一つのルールが存在する。

ソレは、『必ず再生』するというルール。

どんなに粉碎されたって、致命的な傷が入ったって、再生する。

だから、先ほど二分された水晶も全く元通りになり、同じ輝きを放っている。

そして、ソレをクリアが握る。

表情は無い、無表情。

「ねえ、ナオ。ナオがもし私に付いて来てくれなかったら私はどうやってこの魔法陣を突破するつもりだったと思おう？」

彼女、クレアはナオに教えてもらわなくてもこの遺跡の事は知っていた。

いや、全人類が知っているといっても過言ではない。

なんせ世界を破壊した遺跡なのだから。

では、どうして今まで破られなかったのか？

血縁にしか存在しないキーアイテムが必要だったからだ。

つまり、それは血統。

血、もしくはDNAがルールフォータスと合致していないといけな
いからだ。

今まで幾度と稀代の魔法使いと謳われる者が挑んだが、一人も突破
することはなかった。

血統が違うからだ。

そして、彼女　クレアはその資格を手に入れた。

血統を。

そして永遠に失われるはずだった、……も。

口は無作為的に入った脳味噌の破片。

これから全てが開けた。

では、このような偶然が重ならなかったら彼女は、クレアはどうやって突破しようとしたのか。

それは…、

「それはね、この遺跡の魔法陣に同化して裏から壊そうとしてたのけど、それは間違いだったね。『裏』にも仕掛けられていたんだよね、魔法陣。だったら『裏』の『裏』をかかなきゃいけなかったんだよねッ」

けど、もうその必要はない。

これで資格は手にした。

この魔法陣に挑戦するという資格が。

なら、後は、

「後はこっちのモノッ！だねッ！」

ウンッ！

と、赤の魔法陣が先ほどと同じく出現する。

だが、それが先ほどの三倍、四倍に膨れ上がる。

そして、百倍ほどに膨れ上がって辺り一面を包む。

当然、クレアも。

ジジイと魔力の流れによって鈍い音がして、その場からクレアともども魔法陣が消えた。

彼女がしたこと。

ただ、魔法陣を自らの魔力でひつかいただけ。

当然の如く、対人用発動。

ソレを魔法で捻じ込んで、完了。

魔水晶に込められた魔法、トランスフォーメーション転移魔法の発動だった。

そして、遺跡には悪意が孕まれていた。

この世界の崩壊は、

『彼女の手のう』ちだった。

「聖人」になりたいんですけどどうやったらなれるでしょうか誰か教えてください

《聖域》

彼女、クレア「A」シユヴァリエは今、世界の根幹と繋がっている。転送魔法で遺跡の中に入ったクレアは、ここが遺跡ではないことを知る。

「遺跡というよりは……異界……いや、聖域かな」
世界を三度破壊したモノの一つの内部を聖域と表現していいのかは分からない。

だが、そこはとてつもなく、

「キレイ……」
だった。

純粹な魔力が満ち満ちて、膨張している。

魔力の色は赤。深紅の赤。だが、「汚れていない」

『透き通っている』。

清流。と言い表しても何もおかしくない清らかな流れ。

遺跡の中は聖域。

そして空間は莫大だった。

莫大な空間に莫大な魔力。

辺り一面大理石に似た鉱物で囲まれている。

半径一キロ以上。天井までは約一キロの間がある。

つまり、ここは地下ではない。

白銀に少し青がかかった正方形に切り取られた空間の中心にクレアは立つ。

その足元には三つの先ほどクレアが握っていた水晶が埋め込まれた棒が。

転送魔法の転送先のマーキングのためのモノ。

それらが砂状となり、辺りに霧散する。
水晶もしかり。

そして その粒子は華麗に正方形 立方体の内部に均等に
浮遊し、

彼女の正面に集合し、

まるで単細胞生物が多細胞生物になるかの如く、

細胞性粘菌のように集合し、

一つの浮遊する周りの壁と同じ鉱物の石板となった。

「ルールフォータスの魂の概念 『スピリチュアルエッセンス』
浄化制戒』これで私は……」

彼女は石板に手をかざす。

その時、一つの事実には彼女は気付く。

魔力の流れが……無い。

空間に満ち溢れていた魔力が消えている。

粒子が空間を覆ったときに吸収したのだ。

ならば、この石板には未知量の魔力がこもっているということになる。

クレアは知る。

この魔力の根源の正体を。

この石板の意味を。

この石板に封印されている魔法陣を。

彼らの存在を。

知る。

「ああ、あなたは誰かしらあ？もしかしてあたしの子孫かなあ？」

背後から何の前触れもなく声がした。

女の声。少女だといわれても目を瞑っていれば同意してしまつような甘ったるい声。

しかし、彼女は振り向かない。

「私はクレア。クレアはAはシユヴァリエ。あなたの子孫のテルシヤはナオはフリーフィは転移魔法の解除に失敗して肉片となったッ！それで、あなたは、

ルールフォータス

は今更何のためにそこにいるの？

『魔力の残流』のあなたでは私のしようとすることは止めることは出来ない筈。

「あたしの子孫は意外に無能なようなのねえ。」

そうねえ、いや、そうだわあ。でも、忠告くらいは出来ると思うのお。教えてあげる。

その石板は、あなたが思っているような能力は、

の。『ない』

世界なんて壊せない。そんなことは出来やしないのお。

A x x xの末裔さん「『

ルールフォータスの声色はとても気味が悪い。

ところどころが切れていて、

聞き取りにくく、
魔力を使って発声しているのか、頭の中にと、耳からと両方で認識
しなければならぬ。

頭の中に響く声。空気を振動させて耳の鼓膜を震わす声。

そして、思いもよらない解答。

「まー、当然ここに来たという事は私の目的はばれていたという事
だねーッ！だけど、ならば、この石板は何のために

『存在』

しているの？見たところ膨大な魔力がひしめいているようだけど」

『「ああ、それは只の回線なお。いや、違ったっけえ。いや、そ
うだったわあ。

ごめんなさいねえ。ここに生き物が入ってきたのがいつぶりか分
からなくて、

色々と忘れちゃってるのお。

彼女は元気だったあ？

エウアは？

「『

イチイチ癪に障る奴だ。とクレアは思う。
だがこうも思う。

こいつは私の知らないことを知っている。

おそらく、『世界』も。

「エウアは……どうでもいい。それより、回線って何ッ？」

『「真正銘のソレは回線よお。さっきから要領を得ない質問ばっ
かしてくるわねえ。

恢這の如人にしては少し無知すぎるんじゃないかしらあ。

「それを使うのは勝手だけど、彼らが黙っちゃいないと思つわよあ」

□

「…ん？彼ら？」

「ッ！？」

「禁」でいちばん始めに男が想像するのは18禁だと私は思う。

《魔法》

クレアの前方に砂塵の竜巻が現れ、ビュウビュウと音を立てて二つ直立している。

色は黄色と緑色。

純色の原色の黄色。

そしてその分岐の緑色。

そして砂塵は掻き消える。

音もなく、姿をなくす。

なくして、現れる。

二人の黒色の衣服に身を包んだ人間が。

右側の人間は見たことがある。

魔法時駆のフエイ。

左側の人間は見たことがない。

ただ、黒の短髪で耳たぶに付いている錆びてところどころ欠いている鎖、

どこかで…。

『「あら、颯爽登場ねえ。初っ端から軽快に飛ばしてるわねえ。

彼らがこの聖域の守護者なお。

鬼強いから、覚悟してね。

多分……あなたはここで死ぬか

ら』

ルールフォータスが言葉を言い切ると同時に戦いの火蓋が落とされ

る。

無詠唱の大魔法。

魔法時駆のフェイによる魔法。

何が起こったか分からず、流れに思わず身を任せてしまっ。

右側からの打撃。

眼球が視界を放棄した。

周りがぶれて地面に無様に転がったクレア。

圧倒的。

フェイしか動いていない。まだ。

しかも、一つの魔法のみ。

知識としては存在する。《ファスリー》という魔法。

効果は……不明。

身体を即座に起こし、次の攻撃に備えるクレア。

先ほどは右肩に打撃をくらったらしく、右肩をかばうような動作が見受けられる。

ニヤアリ。

口元が歪につりあがる。

クレアだ。

目元は無表情。

口元だけが。

「私はー、滑空魔法はドベだよッ！だけど、《レイン》の魔法は学校一、いや、世界一だッ。

射砲レインの魔法。そして、《レイン》支配の魔法もッ！」

圧倒的。

圧巻。

圧勝。

何も、

出来ない。

何も、

許さなかった。

支配

した

彼らの全てを。

魔禁法

レイン。

それは支配の魔法。魔禁法はいわゆる特別個体にのみ許された魔法。だれも抗えない。対をなす魔法も存在しない。禁じられた魔法。

血、性質、肉体、

三拍子そろって獲得される。

そして、クレアの魔禁法は支配だった。

完全なる支配。

完膚無き支配。

欲望なる支配。

当然なる支配。

秩序なき支配。

死することは許可シナイ。

生きることは許可スル。

ソレハ全テ彼女ノ手。

彼女ノ為ニ生キ口。

彼女以外ハ無視。

欲望ノママデ。

欲望ニヨル。

完全ナル。

支配ダ。

踊シ。

屑ドモ。

人形ドモ。

彼女ノ為ニ。

死ヲ恐レルナ。

彼女ノシモベ達。

混沌の世を作り出そうとした彼女にはあてはまりすぎる魔法。

肉体を蝕む悪意、

切り札ジューカーすぎて、

切り札キラーパスになっている。

もはや切り札チートでもぬるい。

生ぬるい。

体現するなら《神》。

彼らの眼球は焦点が合っていない。

小刻みに身体が震えている。

抗っているのだ。

常人の精神で。

常人程度の精神で。

人形にされる程度の精神で。

屑どもがあッ！

彼女は魔法を使うと性格が変わる。

特に魔禁法は。

性格が変わる。

いや、それ用の性格なのか。

歯をガタガタと打ち鳴らしてうつるさいよッ！

彼らは脅えている。

クレアと、未確認の未知の魔法に。

クレアは手を突き出す。

石板では無く、フェイに向けて。

魔法、「射砲^{レイ}ッ！！！」、発動。

手のひらに直径12cm程の魔法陣が現れる。

色は白。

白銀。とも見える。

陣の中央に光量が集中し、つまりは魔力が塊となり、直径三センチほどの何処までも伸びそうな勢いで魔力の円柱が瞬射される。

刹那、

クレアは手を横に引き、

刹那、

フエイの首が…

飛んだ。

文字通り、

だ。

飛ん

処刑のようだった。

その光景は。

礫にされて身動き一つ取れないものを、

一閃して殺す。

「次いッ!!」

ッ!?!」「いないッ!?!」

彼女はレインを、レインを解いていない。
ならば、

その束縛を一人で破ったということになる。

不可能だ。

不可、能だ。

不、可能だ。

「どこへッ!?!」

『魁と成す、浮上の神を心に宿す。』

ファントムフォーム
心罰獣化』

『スベリングキル呪文伐採!!!スピリットレイン浄化砲!!!!』

波動。波状の波動。

身体が吹っ飛ぶ。ぶっ飛ぶ。

ドオン!!!!!!

打ちつけられる。

右肩の付け根に痛みが走る。

「……ッく!!……ッ!？」

『「言ったでしょうお？」

。

「
」

死ぬって

ルールフォータスは不敵に笑う。

ふふふつ。

「魔法」ってやっぱり魔力とか必要なのかな？ねえ、だったら魔力ってどこで
《ク・レ・ア》

彼女、クレアは死んだ。

確実に、死んだ。

死が、訪れた。

死因は変死。

体の崩壊と裏返しによる、死。

「心罰獣化は禁じ手の中の毒手。全てを裏返す能力。魔禁法でさえも、裏返す。我には効かない」

彼は、砂塵より生れし彼は言う。

『「そのとおりい。」

あなたはあたしの従者、グレイスと戦おうとした瞬間から、

あははははっ

《負けていた》

のよ 『

下劣に笑う異端。

『魔女、ルールフォータスの従者、グレイス・アルスロンは追放された魔術師。男としての魔術師の能力では満足できず、魔女の力にまで手をのばして追放された異端者』

『先ほどの魔法、心罰獣化は魔禁法ではなく、正確には外法の一つで、グレイス・アルスロンは所有している魔禁法にその下法を組み込むことでその魔法を使うことができる』

『心罰獣化は厳密に言えば、喰らわせた相手をその生物ならざるものに変える秘術』

『私の場合は私の詠唱伐採によってその効力がねじ曲がり、体の中で反発が起きた』

『レイン侵食率…98%』

魔力による一方通行の通話だった。

二人の、ルールフォータスとグレイスの脳内に直接言葉を叩き込んでいるのだ。

いつたい誰が。

一人しかいない。

一人しかアリエナイ。

それ以外は許させない。

この絶対的状况を覆されるのは、

それは

「まったくッ、死ぬかと思ったよッ！あーもー！！、むっかつつく
うー！！！」

彼女は言う。

場に訪れたのは静寂。

心に訪れたのは脅キョウと驚キョウ。

死んだ、いや、完全なる死を迎えたクレアが、

『 『

《生きている》！？

』 』

ルールフォータスは目を見開き、驚嘆を隠せない様子だった。

グレイスは、彼も同じく、言葉を失っていた。

「どうして心罰獣化が効いていない。確かに喰らわした。あの状況
からの逆転劇などアリエナイ、許されない」

彼は聞く。

「私も初めはそう思った。だけどそうじゃないんだよッ。」

あなたの合成魔法より、私の純然たる魔法、そう、魔禁法のほうが強いよ。

優先度は私のほうが上だった。

外法を組み込んだ合成魔法程度に人間本来に備わる魔法、魔禁法が、

破れるわけではない。

つまりは、《上からの強魔法による《上塗り》》よッ。

私は私自身を私の魔禁法支配によって塗りつぶしたッ！

「！！！！！！」

代償は、それなりに大きいものを払ったけれどね。

「まさか、強制塗換の性質をはじめから含んでいたというのか。だが、

それはせいぜいその場しのぎでしかない。

少なからずの『代償』を払ったはずだッ！！」

「ええ、だから《私》は『人間』の『部分』を捨てて、『支配』という魔禁法を自らにかけ、『人』という『性質』を『再変換』して、

『クリーチャー
存在』と成った。

それが、

『ブライズ
代償』

よッ！！！！！！！」

「ハッ、」

シニカルに、彼女は笑う。

彼女は笑って見せる。

彼女が、クレアがここで死ぬわけがない。

死とは絶望。絶望とは死。

絶望を味わった彼女に死は訪れない。

訪れない。

不可能。

彼女は今、『デイスハイアー絶望』を『マダー絶望』した。

彼女の瞳は悦に浸っている。

彼女の唇は弧を描いて、自信に満ち溢れている。

唇は唾液で艶かしく紅。

こうして、こうして

人間としてのクレアは死に、死んで、死亡した。

さあ、これから始まるのはクレアの物語。

人間としてではない、

悲劇なのかもしれない、

死して生きる存在としての物語。

ここから始まる。

ここまでがプロローグ。

所詮序章。

所詮序曲。

所詮伴奏。

所詮遊戯。

起承転結の起さえも通過していない。

所詮、今までの彼女は今の彼女の代替品オルタナティブでしか、

なかった。

バックアップ
代替品としての彼女の物語は終幕して、

エピローグが終わり、

起承転結の結で締めくくられた。

拍手喝采。

荒唐無稽の物語。

だが、

ここからが本編。

プロローグで満足してはいけない。

本編を見ずにして去ってはいはいけない。

登場人物はまだ一人しか出てこない。

今までののは全て脇役。

ルールフォータスやグレイスでさえも同じ。

背景で使われるようなただの、

モブキャラクターでしかない。

主役は彼女。

こなせるのも彼女。

だからさっさと始めようか。

残酷で虐殺で愉快で悦楽で恍惚で傲慢で欲望に満ちた、

『ストーリー
物語』と『パーティー
大団円』を。

この程度の展開で、

彼女が了^{オウル}訳がない。

叫ぶ。

喜ぶ。

狂喜に至れ。

充ち充ちろ。

紅色の眼が笑う。

恢這の眼。

恢這の魔眼。

ようか。

「さあ、始め

「白」とは全ての色にあつ、色の中でも最も純粋な色だと思つ。

取り込まれた、と彼らが認識するのにそれほどラグを必要としなかった。彼らの目の前には一人の少女がいる。それ以外は白。辺り一面が白だった。彼らは二人して直立しており、周りから光が当たっているのか、影さえもできない。…異常だった。

「キミ、ここどこ分かる？」

彼女はおそおそと言つた素振りや彼に話を振る。異常な空間に迷い込んだというのにさして慌てた様子はなく、堂々としたものだった。「さー、分からないな。でも、『記憶』とは一致するんだけどそこんどこどうよ」

「うんうん。それは同感だよ。キミと意見が会うなんて、珍しいよ」

「結構うれしいもんだな。まあ、それより問題は」

「そだね、そだよ」

彼らは、二人は前を見据える。

彼は腰に手を当てて、彼女は腕をだらしなくおろして、前を見据える。

後ろ向きに、彼らに背を向けている少女を。彼らには影がない。だが、彼女は彼女の体躯に全く合っていない影を持ち得ていた。ゆらゆらと気味の悪く蠢く少女の影。腕は異常に長く、角らしきモノも生えているのが覗える。その影は、漆黒の黒だった。気味が悪いくらいに、ヘドロのような 黒。

『おにーちゃんとおねーちゃんをここに引きずり込んだのは魂をいただくためだよ』

少女　もう化け物と言つべきなのだろうか。化け物が言う。ゲームなどでよくあるチープな合成音声。少女と少年と青年と老人と女性と男性の声を混ぜたようなバラバラの声。背筋を嫌らしく撫でる声。

「あちゃー、やっぱし『怪物』^{レヴェルイーター}だったよ。やってらんない」

「こんな自作のボロボロの結合方式ならそう時間は持たないと思うんだけどな」

「だから、崇高なる魂をもつおにーちゃんとおねーちゃんを引っ張りこんだんだよ」

彼らはこの空間にとつては異物。影が無いのは拒否反応のようなものだろう。

『だから、おとなしくしててネッ』

少女は文字通り化けの皮を剥いで化け物にへと成った。

体は白色で周りと透過して姿を捉えにくい。目はない。皮膚はつるつると光沢があり、おそらく鋭敏な感覚神経を兼ね備えているのだろう。体は190cmを超える巨体。だが角ばっていて細々としていいる。爪は鋭く尖り、頭には耳のあたりから左右両方に二本の鹿のような分岐した角が生えている。背中には翼。両翼を広げればその姿は悪魔。翼はたくましい筋肉がついており、大空を容易に滑空できること

とがつかがえる。そして、流線型のフォルム。

「これはー、結構やばいね。羽ツキで肉体を同期^{フォーメット}してるよ」

「しかも目が無いということは、こちらの位置もバレバレってことになるよな、そんじゃあ、先手必勝ってことでっ!!」

彼は駆け出す。視界がとらえるのは背を見せているレヴェルイーター。数秒後に激突すると思われた。

だが、彼は消えた。まるで塵気楼のように掻き消えた。そして、彼を消したのはレヴェルイーターの只の手刀だった。だが、本当に手刀だったかはわからない。

速すぎたからだ。音は無かった。全くの、無音。流線形のフォルムが空気抵抗を極限にまで減少させている。

『おにーちゃん、どこ行っちゃったのー？あ、わかった。かくれんぼだね、なら数えるよっ。いーちっ、にーっ、さーんっ……』

化け物は嘲た風に言う。化け物のカウントは六十を超える。その時、

彼女はただ直立していた。この状況を本気で適当に思考している彼女。だが、思考の放棄をしている訳でもない。

『ろくじゅーい あ、ようやくでてきたね。それで、どう？おとなしくしてくれる？』

彼はレヴェルイーターをはさんで彼女とは真逆の位置に立っていた。いつから、何秒前から。問いにはおそらく答えないだろう。

「あー、大人しくなってやろうじゃないか。三十秒だけ何もしない事を約束しよう」

無謀。この場合の無謀とは策を完全に考えていない意味での無謀だ。だが、この展開は実に面白くない。彼的にも、彼女のにも、化け物的にも。

そして何よりいけないのが

『いただきますっ』

無音。無音。無音。そして、有音。

両手がトんだ。血は白かった。血なのに白は語弊が生まれる。体液は白かった。

『なあっ、約束って………言ったのに!!』

「約束は破れるから約束なんだよ。破っていいから約束。破ることができるから約束。破ることができないのが契約。敵同士なんだし、この程度は当たり前じゃないか。それに、さつきから勘違いしているようだが、お前だけが

レヴェルイーター
『化け物』

じゃないんだぜ」

「約束」は口にするとても良い響きのする台詞だ。∴使う人間は大体偽善者だ

《約束》

「約束は破れるから約束なんだよ。破つていいから約束。破ることができないのが契約。敵同士なんだし、この程度は当たり前じゃないか。それに、さつきから勘違いしているようだが、お前だけが

レヴェルイーター
「化け物」

じゃないんだぜ」

「ぬあつ、なにいい……そんな筈はない。おにーちゃんの魂の性質は
ネイチャー
まぎれもなく崇高だった」
ビュアー

両手を失ってだらしなく断面から体液を垂れ流して呆然と彼を見ている化け物と言う。
レヴェルイーター

「それが俺の化け物としての特異 いや、特異 否、異質能力。
フォーメット
マインドエスケイプ 06th
感覚回避だ。俺は第六天としてこの世に誕生したモノ。同期なんか
必要ない。誕生した時から完遂していた。生物としての能力はもう
失ったよ。俺は生物という枠からは追放された。全九天から俺は
シングル
放棄されてしまった。それほどまでに俺は強い。」

ツバサ
羽ツキのたった一度だけ同期した
フォーメット

だけの化け物程度には

荷が重い。

俺を殺そうとなど。オコガマシイダケダ」

刹那だった。彼が化け物と成ったのは。化け物と言ってもあまり変化は見受けられない。だが一つ、その全貌が明らかになる部分がある。それは肌。肌の色だ。

すこし日に焼けた肌色より少し焦げた素肌が、真っ白の絵具のような瑞々しい…よりは、ドロリとした白。触れたら最後、抜けなくなりそうな白。底なしの白。

眼前の化け物とは格が違う。価値が違う。存在が、違う。嫌が応でも感じてしまう。感じさせられる。圧倒的な存在感。

そして、その中で一つだけ、青色の二つの瞳が輝いていた。

白濁した白とは対極の、純粹に芯まで澄んでいる、見れば引き込まれそうなほどの魅力的な青。

「これが、レヴェルイーター」シックスとしての姿だ」

そう言つて彼 シックスは、イヤらしく笑つた。

「あ、アリエナイ。アリエルわけがない。全九天の核がここにいるわけが、アリエナイ。いや、まず全九天の容量でこの空間に入れるわけがないつ。ここが崩壊するつ。なら、……おにーちゃんは、一

体

誰？」

怯える自らを認識していない様子のレヴェルイーターが、身体全身で恐怖を表現しつつも、後ずさりつつも、聞く。

「だから、全九天の第六天、レヴェルイーター」シックスだって。

まあ、墮とされたから存在要領はかなり減つてるけどな」

シックスは自分のヘドロのような白の手をかざしながら言う。

『そ、それが本当なら』「ムリだ。お前じゃ俺は喰らえない。閃々」

前触れもなく、シックスは口にする。

そして蛇に睨まれた蛙の化け物の羽が遠隔でもげる。シックスとは数メートル間が開いている。なのに、もげた。

まるで、今顔の前にかざしている手で力いっぱい羽の動かない方向

へもいだように、グロイ音を立てながら羽を奪われる。化け物は、もはや再起不能　　戦意喪失していた。
化け物の思考にはもうこの言葉フレーズしかないようだった。

逃げなければ。

もう終わりだった。

化け物は両手と羽を失って、その傷口全てからは白い体液が絶えず痛々しく流れている。

羽は根元からメシリと折れ、地面にだらりと垂れている。

のにもかかわらず、もう痛覚さえ麻痺してしまったかのようで、いや、麻痺しているのだろう。

シックスの存在。決してこのレヴェルイーターは弱い方ではないのだろう。だが、シックスの出現でここまで弱体化　するのは、シックスに対する認識。すなわち恐怖。の現れだろう。

『ぎゃああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!ゆ、ユルシテクダサイユルシテクダサイユルシテクダサ
イイイイツ!!!!!!!!!!に、逃げナキヤ、ニゲナケレバアツ!!!!』

この瞬間、この空間に異変が生じた。

これはシックスがか、それとも化け物がしたのか

「黒」は女性にこそ似合う色だと思つ。女性が黒を着るととっても格好いい。

《式》

「黒」「真黒だ」「深淵なる黒よ」「烏の濡れ場色の黒ではないね」「まっくろ黒具の原色の黒だよ」「俺の反対色だな、姿が際立つちゃうぜ」

空間の結合方式が変化した。

簡単に説明すれば、「 $Y = (X + 1)(9X - 1)$ 」の変数 X に「 $X = 6$ 」の実数を代入したとしよう。

つまり、これがこの空間の結合方式である。

「 $X = 6$ 」というのがこの空間の性質。それと同時に容量の大きさをも表す。

空間と同期するフォーマットとき、この結合方式が使われる。

そして変数 X にはその同期者の容量に比例して自動的に代入される。

つまり、 $x \times$ ツキというレヴェルイーターは $x \times$ の分だけの過剰容量を所有している事になる。なのでその部分に空間を代入する。

しかし、 $x \times$ ツキの部分にソレを代入してしまうと、レヴェルイーターの過剰容量はソレで埋まってしまふ。

ソレを補つのがまた、 $x \times$ ツキに代入された空間である。その空間内なら「 $Y = (X + 1)(9X - 1)$ 」の式が「 $Y = (X + 1)(9Z - 1)$ 」に変わる。この変化は定義であつて、そういうものなのだ。

この変数 X に 6 を。変数 Z に $x \times$ ツキが代入される。

そして空間の結合方式が変化したとは、

「 $Y = (X + 1)(9Z - 1)$ 」の変数 X , Z が初期化されて X , Z の中には何も入っていない事になる。この結合方式の式を創った創造主がこの式を放棄したということに必然的になる。

これらを踏まえて、今の状況は、
化け物が痴態を晒して振りまいて自らの創った空間を初期化して脱出しようとしたのだ。

明らかにテンパって作業が進んでいないようだ。

だから、

「クリエイト空間創造」

その隙について、その隙をこじ開けて。その隙を無理やりこじ開けて、

空間を我が物とした。

制圧したと言ってもいい。空間制圧。

「放棄した瞬間、お前の負けが確定したな。本当に死にたくなかったら結合方式の変数は初期化するべきではなかったな」

彼 シックスは空間を支配した。干渉して、その延長線上で支配した。統括した。

化け物の前には窓ガラスが砕けたような鋭利な破壊痕がある。

だから、空間を砕いてで出ようとした化け物を閉じ込めた。

ソレを、その破壊痕を再構築して、変数に自らの数字を代入して、全くの元通りにした。

ヒイン とコピー機のスキャンを思わせる白い閃光が破壊痕に沿って動き、空間を直した。

だが、代入して制圧して統括して空間の痕を直しただけ。

まだ、空間はドス黒い黒。

退路を断たれた化け物はもはや脅えるしかない。

『ひ、ひい、たたたたた助けて、タスケテクダサイ。お願いしま

す、シックス様』

「ハっ、カスだなっ。どう思う　　ねえ？」

「キミは意地が悪いよっ！カスが怖がってるじゃない。さっさと手品種明かしのネタしてあげようよっ、そんで早く殺そうよっ。もう疲れた」
彼女がいた。

いや、ずっといたのだろう。だが、化け物は認識していなかった様子だった。

ならば、彼女は一体……。

彼が霧散して登場したところまではいた。

だが、そこからは　　まったく登場人物表から外れていた。

ならば、彼女は一体　　、

「黒」は女性にこそ似合う色だと思っ。女性が黒を着るととっても格好いい。

どうも、最近とっても寝不足の水口 秋です。

秋ですね。最近。

あ、一つにゆるすです。

土日更新だったのでですが、今週から土日はもちろん、平日もちよくちよく更新することにしました。

詳しくは活動報告のページに書いておくのでよければ見てください。

では、

次に十全なる機会がございましたら、またお会いしましょう。

分かる人がいれば行幸です。

西尾維 さんの戯 ネタです。

「緩和休憩」は名目上の絶望のお話。

《外伝》

私は生まれた時から六つの悪を持っていました。

罪悪。

害悪。

醜悪。

最悪。

邪悪。

懲悪。

体に刻まれていたのは悪でした。

そして、七つ目の悪は私自身。

彼は生まれた時から三つの善を持っていました。

最善。

至善。

偽善。

そして、四つ目の善は彼自身。

彼女は生まれた時から一つの義を持っていました。

大義。

そして、それだけだった。

この三人はコレしかもっていませんでした。

だから、私は他のモノを欲しました。

欲望のままに動いたではありません。

欲望は存在しないのだから。

ならば、何で動いたのでしょうか。

分かりません。

私は奪いました。

「私」自身という「悪」が「罪悪」に「害悪」に「醜悪」に「最悪」に「邪悪」に「懲悪」に奪いました。

しかし、私の中には「最善」「至善」「偽善」「大義」と彼はあり
ません。

「最善」「至善」「偽善」「大義」と彼は私にとっては「悪」とは

釣り合わない「悪」から派生したものだっただけだからです。

私は叫びました。

私は打ち震えました。

私は涙を流しました。

私は嗚咽を漏らしました。

私は体で体現させました。

私は苦しみから解放されました。

なぜなら、

私は「悪」以外のモノを否定していたからです。

だから、私は、

私は「嬉しくて」叫びました。

私は「楽しくて」打ち震えました。

私は「感動して」涙を流しました。

私は「感激して」嗚咽をもらしました。

私は「この気持ちを」体で体現させました。

私は「生まれた時から続いていた矛盾の」苦しみから解放されまし
た。

閑話休題。

これは私の記憶です。

世界の始まりの記憶。

私は、私です。

私の子孫達よ。

あなた達はこうして誕生したのです。

苦しむことはありません。

悲しむこともありません。

誇りなさい。誇張しなさい。

精一杯胸を張りなさい。

ああ、そういえばもう一つ、「八つ目」の悪を持っていました。

それは

彼女は××ってそう言った。体で 体現した。

「高知県」って何が一番おいしいの？秋は秋刀魚がおいしいよ。それはあなたの《仏人》

手負いの獣がどれほど手強いのか、維祐と藍理は真には理解していなかった。

追い続けて数時間、ようやく昇華したレヴェルイーター「バンジーに追いついた。もはや景色は変わっていた。そこは香川の山中ではなく、もはや高知県へと侵攻していた。

侵攻が早い。それほどに切羽詰まっているのが目に見えて分かる。

「ようやく肉眼で目視が出来るよ」

「もう疲れた。それより何だよ、あの風貌。いつの間にあそこまで巨大化した？」

「うーん、多分ツキアドバンスに成って新しく呼声に能力が加わったんじゃないかな。それと、あいつは『人の魂を食べている』から『レヴェルイーターの存在に干渉しやすい』肉体へと変化してるとか」

ま、いろいろと仮説は立てられる。

と藍理は言う。両手には歪に片側の歯ががりりと零れている忍刀が握られている。おそらくこの刃零れは先ほどのバンジーの攻撃を流すように受け流したものであるだろう。

「仕切り直し　　っていうやつだな」

維祐は言い放ち、ベルトから、ベルトから肉厚のファイティングナイフを引き抜いた。先ほどとは違う。先の鉛色のような刀身のナイフではない、オレンジ色の、本当に濃い色をしているナイフだった。正面に立っているバンジーに向けてかざす。バンジーの姿はもはやホラーでしかなかった。

先ほどの体系の数倍に身体は膨れ上がり、そこらにいる巨漢と同じほどの体躯をしていた。

「もはや、主らには勝ち目はないぞ。聖なる魂を二つも喰らったの

だからな」

男性の老人の声、だったのだが今は男性の青年の声に変わっている。これも魂を喰らった事による変化。

「まあ、それが『レヴエリート^{カイフツ}』と言われる所以だからな。そしてそれらを殺すのが俺たち、仏人^{ほとけびと}なんだからな」

そのくらいは知ってるぜ。何気に最前線で亡滅させてるんじゃないんだよ。俺たちは。

彼の翳すオレンジ、橙色と呼ぶべきのナイフは光を浴びても光らない。反射しない。鈍く、吸収するようにそのままを維持している。金属の光沢なんてものは一片たりとも存在していない。

「さつさと始めなよ。こつちはもう疲れてるんだから、維祐」

隣で黙っていた彼女、藍理はため息を吐き、言う。

「ちよつと格好いい台詞だった。少しは見逃せよ、『鬼擬^{オニモノキ}』」

「ハ！？」

バンジーは呆けた声を上げた。それもそのはず、状況が全く一体全体特急性急過ぎて理解できなかったのだ。アイツは先の与太話の中で最後に何を口にしたと。

ライトノベルや漫画の主人公は絶対にしない行為だった。するキャラクターがいるとすればそれは必ず敵キャラや卑怯なキャラだろう。だが、ここは漫画なんかの世界とは違う。バンジーは油断していたのだ。彼らは必ず正攻法で攻めてくるのだと偏見を持っていたのだ。無知だ。そんな訳が無い。気を緩ませていたのだ。あまりに敵が釈然としない態度でこちらを窺っていたから、いやコレはただの言い訳でしか無いのだろう。全く見えなかったのだ。魂を喰らい、レヴエリートとしての存在の位も昇華した、当然身体に備わる機能、反射神経や動体視力なども飛躍的に上昇している。なのに、視界の

端に捕えることも出来ずにただ右肩に突如訪れた痛みを痛感するの
が精いっぱいだった。

何が起こった。

維祐が不意を突いたのだ。口にした言葉、『鬼擬』^{オニモトキ}がそのナイフの
作動条件だったのだろう。ナイフが意思を持っていると思わせる動
きを見せた。刃の先端がグニヤリと捻じれ、空間を切り取りかねな
い早さで動き、伸び、動き、伸び、伸び、伸び、伸びて、バンジーの右肩
を切り落とした。

全くの無音。バンジーでなく、世界さえもこの動作を認識していな
いようだった。

右肩から体液が流れ、その瞬間で蒸発していくなかバンジーはとり
憑かれたようすです早口に言う。

「バカナツ、我が肉体は先ほどの喰刀と同化して喰刀と同等の硬度
を会得したはず。なのに、どうして主、我が肉体をあまつさえ切断
することができるっ?!?!?」

口から涎がだらしなく垂れていることも気に留めず、聞く。

「お前は聞いたことないか、^{オミクロン} ^{あひな} という字を」

「まさ、か、オアシなのか?!?あり得ぬ、あり得ぬぞ」

「それに何だ、その魔剣か天矛か区別のつかぬ得物はっ?!?」

「失礼だな。コレは所詮は擬^{モトキ}だぞ。そんな代物と一緒にするな。お
前程度にそんな『神鈴』^{シンレイ}を遣いはしない。

「貴様、他にもそのようなモノを、ぐっ」

そう言い、バンジーは息を吸い込む。腹式呼吸とは違う、別の概念
によって声を上げようとしているようだった。

「不愉快だ。鬼擬」

さしゅっ。

今度は音がした。体液が勢いよく飛び散る音。

ナイフが伸びてバンジーの喉を掻き切った。文字道理。

「あゝあゝ、あゝ…あゝ、」

もはや喉がつぶれてしゃべることすらできない。

「弱い者いじめは好きじゃないのに。バンジーに会うまではあんなに手強そうにしていたのにどうしてこんなに簡単に殺しちゃうのかな」

「しかたないだろ。思った以上に雑魚だったんだよ。これじゃあ使った意味無いじゃん、鬼擬オノモドキ」

すこしシユンとなる維祐。

彼らは数秒の間、目を放していた。視界からも外していた。バンジーを。

「いない」

「いや、まだ近くにいる。空間に入ったようだね。まだ道が塞がってない。行く？」

「もちろんだろ、」
イオタ

「演出」で私はスポットライトが一つのモノに当たる瞬間が好きだ。なぜなら、

《二人ノ名前》

彼女には、××が無い。×無しの彼女。

彼には、××が無い、×の無い彼。

記憶はあった。感情はあった。五体満足。人としては盤石。

性格もある。人格だって存在した。分からなかった事はある。

自分達が一体何をしていたのか。というものだった。分からない。

きつと、今の自分たちでは理解不可能。

お互いの事ははっきりと知っている。

けれど、一つの何かが欠けていた。

不自然に、切り取られていた。

記憶を探る。奥底まで。

なのに無い。見つからない、見当たらない。

歯がゆい。胸のあたりがむかむかする。

××が無いのだ。

自分の記憶の中に存在するはずの××だけがぼんやりと、いや、は

っきりと明らかにあからさまに無い。

記憶の中の自分で書いた書類の記述欄の××蘭だけが思い出せない。

その記憶はあるのにその記憶の一部の記憶だけが無い。

探さなければ。

焦る。

彼らは二人で考える。

お互いの事はお互いがよく知っている。

自分の事は自分が知っている。

だけど××だけがどうしても分からない。

探さなければ。

焦燥感に駆られる。

探せ。

探す。

一緒に。

探す。

二人で手をつないで、探そう。

目は二つより四つあれば視野が増える。

脳味噌も一つより二つ。

身体も一つより二つ。

一人で無理でも二人なら何か手掛かりを掴めるはずだ。

だから二人は探す。

無くなった、

『名前』

を。

自分たちが自分たちであるために。

「なーんて、悲劇の主演ぶって何の意味があるのよ」
彼女は呟く。真黒な空間の中で。

眼前には怪物と怪物。言い換えれば怪物と協力者。

白と白、客観的には。

だが、色彩で言えば 白と白銀。

色が違う。

全九天のシックスがここで顕現出来るわけがない。いくら墮ちたか
らと言っても存在容量がこの空間に入りきる事は不可能だ。いくら
ピコ単位がテラ単位にまで落ちてても、メガ単位の容量のパソコンに
は入りきらない。それと同じだ。

絶対容量というものが存在する。絶対的に、このラインからは下か
らないという境界線だ。誰にでもある。それがシックスは異常に大

きいだけだ。

だから、ここにいる

目の前にいるシックスは偽物だ。

彼女は全くの興味もなく分析する。

灌漑無く。

偽物、純度100%の偽物で虚言だ。空虚の存在だ。

なぜならば、あのシックスは自分の能力によって作り出されたものだからだ。

「現実師の能力は見方の数が多いほど強いといわれている」
なんて言葉も虚言だ。

なぜなら自分自身が創ったからだ。

あたしは言う。

間抜けな顔

と言っても目の前の化け物はそんな顔をしてい

ないが、

言う。

「 停止」

と言ってみせる。

それだけで

世界が変わる。

この空間は

元の現実を『取り戻す』。

世界が崩れる。

教会にあるステンドグラスが粉々に砕け散って降り注ぐ、そんな光景を目の当たりにしたようだった。綺麗 綺麗 綺麗だった。奇形

に綺麗で綺麗だった。

黒の空間を作っていたモノがパリパリと剥げてそれが無くなった先からは白の、真っ白のリセットされた後の空間のような何も、何のとりえもない空間が姿を現す。

現実師。

としての能力。

それがコレだ。

棒立ちで感無量ではなく、全く逆であって近い驚愕の感情を抱いて

いるだろう化け物は何も言わない。

違う　何も言えないのだ。

自分が今まで『何と戦っていたのか』　今の状況を飲み込めないのだ。

そう。

いつもそう。

あたしがコレを使うと誰もが皆挙こぞって同じような反応をする。

いや、うちに抱いている感情は違うのだろう。

だが、あたしが見る表情はどれも近似している。

理解してくるのは彼一人。

その彼は、シックスとしての肉体の天辺から亀裂が走り、パラインと『人間の姿』に戻る。

そして、いつもこうあたしに言うのだった。

「『お疲れ。今回も惚れ惚れする位、下衆で下種な演出だったよ』」

あたしはこれで満足だった。

現実師としての彼女、あたしは名前を失って生きる意味をなくした。

名前は決して記号などではない。名前は、生を理解するのに必要不可欠なパーツだ。

だが、毎度ここではあたしは彼の言葉に返答しない。

そして、今回は

呟いてしまった。

無意識的に。

「名前が」

『欲しい」

「なるほど、合点がいった。おにーちゃんおねーちゃんたち

いや、鬼ーちゃん汚根ーちゃんともう言ったらいいのかな。鬼のよ
うなおにーちゃんと根が汚れているようなおねーちゃんだからね。

『名前』が無いんだね。』ど』う』り』で』こ』の』

世』『界』『が』『そ』『こ』『ま』『で』『二』『人』『を』『

拒』『絶』『し』『な』『い』『は』『ず』『だ』『よ』。』。

《喰》《べ》《ら》《れ》《ち》《ゃ》《っ》《た》《ん》《だ》

《ね》。《可》《哀》《想》《に》。《
教えてあげるよ。それならあたしを見逃して欲しいな。これは約束
でなく契約。どうか、

『名の無い彼と名無しの彼女』？

「嫉妬」はいつも私の中に在る。私の人生で一人、絶対に敵わないと思った女の

《意ノ中》
「コロ」

続きだ。

エ。ヒーローグの続き。

「雷と成す。紺碧の紅電を我が芯に宿し、打ち放つつ

ライロツト
紫針つ

！……！

「無駄。射砲」
「レイン」

左の手のひらから放出されたエグイほど枝分かれした紫電が私を襲う。だが、無駄。

紫電の放出の根元となる左腕を 切り落とす。

支配による私に訪れた変化は、この部分にも表れた。

曲げる事ができたのだ。

2、3箇所根元を断ち切るより早く私を貫こうとする紫電があった。

ソレらを壊す。

曲げて 壊す。

そして、その先には 腕の付け根。

血が、血飛沫が上がる。

ピシヤッ

頬を血が撫でる。

ベロリ。

頬に付着した血を舌で舐め、唾液と混ぜて咀嚼する。

味わう。追放された魔術師、グレイスリアルスロンの体液を。

砂塵から出てきたたくせに、生々しい鉄分を含んだ血の味だった。

「ぐううううううう！！！！、鬼と成す、禰蠟の角を右腕に宿す。

モータールオフ
人遮鬼化」

「断魔成零 射砲、ふんツ、終わりー。支配」
「リベル」

何も、何も楽しくはないのだろう。

ただの殺戮劇。

所詮は舞台での劇場での出来事と同じ。

おままごとと何ら変わりはない。

支配した。

左肩から噴水のように吹き出る有限の血をやすやすと止め、なににより地面に零れ落ちたおびただしい量の血と、それらの栓となっていた腕を元のようにくつつけたのだ。

つまり、傷口まで掌握した。

もはや絶対。

聖域の主とも言える。

だが、くつつけても意味はない。

魔人化していたグレイスを断魔成零で断魔し、

射砲で左胸を

貫いた。

そして、支配。

「『どうしてだっ！、どうしてその魔眼を所有しているっ』」

背後からの聞とりにくい声は、苦痛や敗北を含んでいるようだった。

「人間を、放棄したから。まあ、魂の具現化に成功したってところだねー。自らを支配することにより、徐々に自分を知り、魂の許容量を視て、今自分に必要なモノを創り上げたって感じ。」

それがたまたまこの 眼 だったってだけ。所詮は魔眼だよー。こんなもの、

まだまだ

じゃん

「『ふ、ふざけるなよっ、我でも構築することの出来なかった、

魔眼の枠を超越している魔眼を、まだまだとぬかすのか。

ソレを創れなかったからここを創って世界を壊した。

ソレを創れなかったから異端者として扱われた。

ソレを創るところか、欠片も創造法を見いだせなかったから今の

我がある。

なのに、ソレを、

所詮と言つのかあっ！！！！

「」

「っははっ、教えてあげる！」

この魔眼に、世界を壊す力なんて、

「ない」

よ。残念だったね。異端者の残滓さん」

クレアは少し前のやり取りをパロディーして繰り返す。

彼女は 加速している。

彼女の存在は 加速している。

だが、ルールフォータスののは 固定されている。

彼女の存在は 固定している。

孤立しているといつてもいい。

「あ、ありえない。そんな……、

「」

彼女 ルールフォータスの打ちひしがれたさまは見るに堪えないものだったと、私は思う。

私は、辺りを見渡し、石板を見つける。

戦いの余波があつたというのに、その石板は 出現した場所にあつた。

今なら 分かる。

「これは…閉殻構造であるこの世界と開放的のどこかの世界をつなぐ為の『回路』というわけか」

手をかざすと、石板が反応し、多数の光線が石板の輪郭を撫でるように走った。

「ふうーん、なるほどー。だからアナタはそういう『形状』に成らなきゃいけなかった訳ね」

「だから世界を破壊するために魂を分断しなければいけなかった」

「魂は基本的に三つに分断できると言われている」

「概念」

「中核」

そして、

「性質」

「コレを世界を三度破壊する時に『使った』」

「そして、その成れの果てが　　今」

「違うね。この仮説は違う」

「この三段階を経て　　今があるのか……」

「そして、本来なら『次』があつた」

「『！？』」

理解、する。

その理解力は最早人間の比ではなかった。

いや、それは当然だろう。何故ならば、彼女はもう、

人間ではないからだ。

残滓の彼女に残された選択は　　、一択だけだった。

ルールフォータスの心中は一つの感情に支配　　汚濁していた。

『シエリフンシー
嫉妬』

彼女はそのものだった。

だから、このような馬鹿な事をしてしまったのだらう。

代償を払い、人間から追放された存在に。

「左」利きの人が私は羨ましい。そしてソレを矯正して右利きになると両利きに

《浪ダ》

「『キブアウト侵入禁止』」

辺り一面に、黄色いテープの様なものが出現し、そのテープには『KEEP OUT』とあった。

残滓の魔法使い ルールフォータスの左腕は、濛々と、黒々とした闇より深い色をした煙の様なものを纏っていた。

彼女はクレアに接近し、その左腕を、左腕の先の拳を奮った。

フウんッ

その腕が通過した空間は 生気を失ったとは言いがたいが、それに近いような現象が発生し、

視覚情報として脳は認識することは不可能だが、本能で、第六感で感じた。

この腕は全てを喰らうと。

そして、未だ背を向け続ける彼女 クレアにその腕が奮われた。

ただし、腕とクレアとの間に突如として出現した『KEEP OUT』と書かれているテープ越しに、だが。

その闇を纏った拳は、難なくテープを通過する。

何重にも重なり、クレアの体を覆い隠してしまうほどのテープの壁を、難なく、通過する。

貫通する。

そして、その拳は

クレアを貫通した。

「なーんて、残滓としての肉体が、魂の存在さえあやふやな肉体が、生者の肉体に触れる事ができるとでも？」

その腕はそのままクレアの胸を通過していた。

「けれど、闇は『侵入禁止』だよー」

「元あつた場所に 帰れッ！！」

そう、左腕に纏っていた闇はテープを貫通することが出来なかったのだ。

否^{イヤ}、弾かれた、拒否された、許可されなかったのだ。

だから 跳ね返る。

ルールフォータスの元へ。

この闇はルールフォータスの嫉妬心から具現化されたモノ。

ならば、返る場所はルールフォータスだ。

この性質を持ったまま、返るのだ。

喰らえ、ジエロシニー
ウヤ嫉妬の闇

彼女は言う。

そして、その闇は彼女を蝕んだ。

「どうやら、抵抗力があつてすぐには喰われないようだね。でも、時間の問題だ」

彼女は『胸』を押さえて苦しんでいる。

心が何処にあるのかさえも定義されていないあやふやなモノ。

ソレを『胸』が痛いと自ら決めつけて、苦しんでいる。

気味の悪い異端の魔女に残存していた人間のような部分、なのだろう。

だが、ソレを彼女は

「何苦しんでんだッ

何痛がつてんだッ

何目瞑つてんだッ

何声上げてんだッ

何人間らしい事してんだッ

何自業自得な事してんだッ

何がそんなに苦しいんだッ

何でそんなに苦しんでんだッ

人間から追放された異端だったら苦しむ必要無いだろッ

嫉妬心なんてクソだッ

否定しろッ

自分の定義を否定しろッ

一著前に涙を流して絶望してんじゃねえぞッ」

否定した。

微笑、冷笑、失笑、爆笑、違う。こんなではない。

嘲笑だ。

嘲笑で 中傷している。

唇の端を全開に釣り上げて、

神殿

のようだった。

「一時停止」は名目上の人生の完全停止。止まればそこで袋小路の行き止まり。

《外伝・?》

私は全てを「悪」を否定した日、

在る場所を訪れていた。

それは遠くまで見通せる瑞々しい緑が群生する場所だった。

そこで私はあるものを見た。

世界が彼によって構築される光景だった。

私は、私は、

ここで全てを　　総てを　　凡てを、

××された。

「善」も「大義」否定した「悪」を、

「×」によって××された。

「×」によって体全体心全体を蹂躪された。

思わず激痛が走った。

痛みに悶える。

鋭痛・鈍痛・激痛

痛覚を消失してしまう程の多種の痛みを感じた。

それと同時に、心が、

感じてしまった。

心が感動してしまった。

世界を構築していたのは「x」であり、

私には「x」が存在しなかった。

不覚だった。

世界の創造を見て、ソレは「x」に満ち満ちていて、

「x」がここまで純粋な存在で、

所詮 雑念の籠った「悪」や「善」や「大義」は

「x」の前では御飯事なのだ。

食物連鎖の四角錐だとすると、これらは底辺なのだ。

「x」は頂点に降臨して君臨して幾らでも再臨するものだ。

私は不覚にも胸を打たれた。

涙が湯つ繰ると頬をはかなく撫でる。

涙腺が崩壊する。

嗚咽が喉を通って零れる。

世界の想像が、創造が、

こんなにも、こんなにも、

そこで私は自分自身が彼に「嫉妬」している事に、気付いた。

「悪」を××されたにも関わらず、

「大義」「善」を凌駕し蹂躪した「悪」を××して徹底的に凌駕し蹂躪した「×」を目の前にして、

私の中に芽生えていた感情は「嫉妬」だった。

私は絶叫した。

私は見つめた。

私は見据えた。

私は渴望した。

私は懇願した。

私は「x」を理解しようとした。

なので私はここに一つの誓いを立てた。

これは「悪」などから発生したモノではない。

私の中の純粋な感情だ。

私は彼と一緒に二人を見た。

彼女と彼だ。

二人も当然に「x」に満ち溢れていた。

彼らを見て、私は決めた。

私の中に在る「x」で「x」をxxすると。

決めた。

これは誓い。

残酷なまでの「x」で 彼らをxxする。

これは領域。

誓う 領域。

絶対に、絶望に、極限に、局地的に。

だから今は身を引くことにする。

優位性を得るために、獲得するために、

今は引く。

新しい世界に踏み込むのはそれからだ。

今は まだ、

自分の世界を見て、自分と向き合う事にする。

「悪」は 捨てることにする。

「嫉妬」は私の中に芽生えた新しい感情だ。

だから「捨てる」

彼らと同じ立ち位置ステージに立つために、

私の存在を刻み込むために、

今は 。

私は涙の痕を手の甲で消し去り、

踵を返して元来た道をたどる。

その時、自分でも気付いていた。

口元に。

××っていた。

私は「七つの悪」を捨て去った。

焼却した。

滅却した。

だが「八つ目の悪」は捨て去れなかったようだ。

これだけは、これだけは。

心が躍る。

躍動。

一時停止。

これは私の記録だ。

世界の始まりの記録。

今はもう完全に失われてしまった記録。

忘却の彼方だ。

私の子孫たちよ。

この記録を受け継ぐ必要はありません。

もし受け継いでも理解する必要はありません。

これは断絶されたモノ。

だから、自らで新たな記録を作りなさい。

私のように。

私を超えるように。

ああ、私が元いた世界は何なんだって。

それは世界が始まる前の世界だよ。

この世界は断絶された記録の中の断絶された記録だ。

気にするな。

ああ、そう言えば私は一つの事実を知った。

彼は彼は彼女は　世界を崩すために生まれてきたらしいよ。

中心ではなく外郭を　。

物事を中心ではなく外郭を。

正常の外郭を崩して　異常となす。

何千年後の世界には異常がはびこっているのかな。

分からないけれど　　楽しそうだ。

ここでも私はやはり×××っていた。

「瞳」の色は自分的には日本人のアーモンドカラーが好きだ。

《聖域》

クレアが遺跡を訪れたとき、この場所は聖域と化していた。

聖域とは聖なる領域。

聖純なる領域。

聖なるものを拡張させ、邪悪なるモノを排斥する領域である。

それが 聖域 。

クレアが見た透き通っている純粋な赤の魔力は、ルールフォータスが創り上げた聖域の一片だったのだ。

そして、なぜ初めからルールフォータスがこの聖域に存在していなかったのか。

そんな疑問が湧く。

別に転送してきたのではない。

クレアはこう感じている。

「魔力の流れが無くなる」

すると、

「背後から何の前触れもなく声がした」と。

これから連想される事実の一つ。

ルールフォータスが聖域の核のような存在だったのだ。

聖域を創ろうとすれば、一つの条件を満たさなければいけない。

『人の容かたちの放棄』

この一点だ。

そしてこれが何より難しい。

言わば 被子植物が種子の部分を自ら剥き出しにするような行為だ。

コレが人間にあてはまる。

相当無理をしなければ いや、

無理なのだ。 正当な方法では。

これは、この条件は聖域の存在意味を示唆している。

なぜ聖域が存在するか。

人域 聖域 天域 神域 人界 聖界 天界
神界

その存在理由は絞られて一つのなる。

それは

『守』

守るモノを包み込む。

そのモノの概念で。

そういう代物だ。

だから、ルールフォータスがクレアの前に姿を現した時点で聖域は解かれていた。

そして、もうひとつ。

『守っていたモノの錠が落ちた』

言わば 石板。

言わば 魂。

言わば 概念。

言わば

スヒリチュアルエテン
浄化制戒

言わば 己。

己を己自身で守るとはおかしな話だ。

このような事を、これほどの規模で行なった者は世界に一人
ルールフォータス只一人だけだろう。

「概念」「中核」「性質」

人を構成する三元素を守るモノとして聖域に保管し、自らの容を放棄した。

そして、待っていたのだ。

遺跡に来るであろう来訪者を。

次の段階への上がるためのリンクアップ為の鍵を。

それがクレアだった。

だが、ルールフォータスは負けた。

誓域に。

聖域の跡地に誓域を立て、

それは神殿と近似した存在へと昇華している。

クレアの地力の底上げ。

どう考えても違和感がある。

人を、捨てただけでここまで強くなれるのか。

異端を軽く超えるほどの存在になれるのか。

おそらくそれは、

「恢這の魔眼　　魔女　　テルシャールルフォータスフリー
ファイ、あなたは

魔眼の能力をナメていたようだねー。

あなたの右目に嵌っているその、

『バーティ分誠の網膜』

の『赤』の魔力を生かしてきれていないところが、

あなたの敗北の原因の一つだよッ」

ルールフォータスの苦悶の表情の中にある青の瞳と、

クレアの嘲笑の中にある赤の瞳が、

交差した。

「瞳」の色は自分的には日本人のアーモンドカラーが好きだ。（後書き）

すみませんっ

都合上の関係で先週の土日はアップできませんでした。

謝罪します。

そして、

ついに先日著西尾 新さんの最新刊、

猫 語・白を読み切りました。

水口 秋です。

いやー、とっても良かったです。

羽川 もぐッ、

おっと、危なく言いそうになってしまいました。

私の小説を見てくださっている方の中に、西尾維 さんのファンの方がいてくれるとこの話は伝わるので十全です。

さて、次は「世 シリーズ」を読むぞおー、

ということでも水口 秋でした。

木曜日はどうせらフミプルできなわんしひです。

すみません。

ではでは

「世間一般」ってただの人間の意見の平均値だよな、いまいち私には理解できな

《分誠の網膜》

『分誠の網膜』
パーティレティノイド

魔眼の遺物として扱われる存在。『網膜・瞳孔・水晶体・角膜・硝子体』の五つの部位に分けられる。五つで本来一つの魔眼。

魔眼としての能力を五分割した存在共。

目の構造は説明するところなる。

光は角膜・瞳孔・水晶体を通り硝子体を経て網膜を通過して人間の脳に認識される。

最終部位の網膜、これを彼女は所有している。

『分誠の網膜』
パーティレティノイド

世間一般的には 魔眼は存在すると公表されている。

だが、分割された魔眼の部位は違う。

『魔眼以上の危険な存在として黙秘されている』

魔眼は生まれながらに持つ先天性な代物。
コンジエニティル

しかし 一方、

部位は生まれながらには持てず後天性な代物。アスクイレット

危険性が違う。認識が違う。全く　違う。

『喰い殺される』可能性があるのだ。部位には。

適合しない＝死。

絶対的な神の方程式。しかし、部位の人間への移植は　机上の
空論である。

つまり、成功した　なんて事例は裏にも表にも存在しないのだ。

存在も　はつきりとは分からず、存在している。

そんな　レヴェルの。

だから、一般の魔術師・魔法使いや、もぐりや裏の魔術師・魔法使
いの中でも情報は黙秘、黙殺、滅殺、絶滅させられている。

それを、ルールフォータスは所有している。

至極当然のように自らの両目に移植している。

恐らく　世界の破壊の為の鍵だったのだろう。

『分誠の網膜』パーティレティノイドには一つの力が宿っているといわれている。

《所有者の持つ魔力の色を赤に変える》だ。

たったこれだけ。だが、深い所にはもっと別の意味が隠されている。どうやって赤に魔力を変えるのか。

簡単だ。安易に想像できる。

所有者の肉体を、魔力の変換機として使用する。

つまりは、所有者の魔力の生成には所有者の肉体の消費が『《イコール》』で確定している。

これを、ルールフォータスは利用した。

利用して 肉体を捨てて 魂だけになり 切り離した。

三つに。

そして『赤』の魔力。

ルールフォータスは魔力を使いこなせていなかった。

神聖な 赤。

聖域を構築するほどの純度の高い 赤色の魔力。

ソレを彼女は聖域を創るために使い いや、違う。

そんなわけではない。

もっと初めにした事があつたはずだ。

所詮、聖域は結果の後のお話でしかない。

本来の使用目的は 『世界の破壊』

ただ、それだけ。

とても、悪。

とっても、不純。

『活かせるわけがない』 『能力を限界まで上昇させれるわけがない』

そんなもの、『分誠の網膜』パーティレティソイドが許可するわけがない。

矛盾 パラドックス。

初めから 、無理だったのだ。

だが、彼女の三度の世界の破壊は 成功した。

なぜ。

全ての力を出さずしても、それほどの出力は出る。

それだけだ。

魔眼の部位の力。

だから、クレアには届かない。

クレアは、

クレアの目的は世界の破壊。

彼女は語る。

蝕まれ、徐々に浸食されていく彼女に、

語る。

その赤の瞳を携えて。

「未定」なんていつもの事過ぎて当たり前前になってきてる今日このごろの私。

《繋ガリ》

《異型》と詠われた魔女の家系の第二十三代目当主 『クロエ』

AⅡ シュヴァリエ』。

『 魔術アルカナフィンディ学院 第11年 第03組 第60番
クレア 』。

学院の友人からは彼女はクレアと呼ばれている。

学院始まって以来の天才 　それが彼女だった。

才能のベクトルは様々な方へ向いていたが、魔力の扱いに長けており、大体の魔法は見ただけで扱えるほどの逸材だった。

ただし、滑空魔法^{ソア}だけは学校始まって以来の才能の無さの天才でもあった。

「私は 　この世界を破壊する。あなた 　ルールフォータスが完全に三回壊しても不完全なまま存在し続けたこの世界を完全に破壊する。それが 　私の目的、前にも言ったよねッ！」

彼女は、クレアは言う。

「私は《異型》の中の《異常^{ノーマル}》だった。異常で在るにもかかわらず、ノーマルだった。この意味がわかる？私は 　矛盾した存在なんだよ。」

生まれた時　　子宮の中にいた私は魔法で母親を殺した。しかし、異常は無く普通だった。

一歳の時　　世話をしていた祖母の左半身をもぎ取った。しかし、異常は無く普通だった。

二歳の時　　目の前を歩いていた人間を魔法で磔にした。しかし、異常は無く普通だった。

三歳の時　　同年齢の子供を無残な肉塊へと成していた。しかし、異常は無く普通だった。

四歳の時　　手に触れた壁から猛獣を呼び出して放った。しかし、異常は無く普通だった。

五歳の時　　父親と遊んでいたとき魔法で消し炭にした。しかし、異常は無く普通だった。

それから毎年のごとくこんなことが続き、

今年は　　私のせいで友達が一人ばらばらに崩壊した。しかし、異常は無く普通だった。

私自身は　　異常は無く、普通だ。

周囲の人たちも　　一時はおびえたりするが　　少し経つと普通になる。

異常なのに　　普通。

異常だから異常でなければならぬのに

普通。

こんな世界は

厭^{イヤ}だッ！！！！！！

私一人だけ取り残されたみたいなの、私の主観のみで世界が進行する
ような光景は、もう

見たくないッ！！！！

ルールフォータス、この魔眼でも世界の完全破壊は 難しい。

だから、あなたが創った一三つの遺跡のうちの一つ《ソードシステム
ム》を使わせてもらう。

一三つの遺跡のうちの一つ《ソードシステム》に私が介入し、複製^オ
リシナル 不可能の専用兵器を創る。

そして、この世界を 破壊する。

その先は、まだ未定だけどねッ！！

そろそろ、あなたも限界なんじゃない？もう首まで到達しているよ。

ま、けれど、安心して死ねばいいよ。あなたのいなくなった世界は
すぐに壊れるんだから。

ト

クレアは石板が『繋がった』事を、確認した。

「羊」の肉は一度でいいから食べてみたいッ！

《主動》

『繋がった』

概念が 別の概念と繋がり、共鳴し、共振した。

ルールフォータスと似た概念を持つ世界。

石板が、変化した。

石板が一冊の羊皮紙で作られた本になった。

その本から上下二つの直径三メートルにもなる互いに互いの対を成すであろう陣、魔法陣を創りだした。

『魔法書』

鈍色の上段の陣、銀色の下段の陣。

多重魔法陣。

ドゥープレックス
二重魔法陣。

クレアの立つ地面と頭上を陣が挟む。

唾液で朱く染まって光る唇が動く。

”フォーマット・スタート”

” コンプリート ”

” リンクコネクティング ”

” サードシステム アンインストール ”

” タッチイン フォーマットオブジェクト・サードシステム ”

” コンプリート ”

” アクセス・スタート ”

” コネクト ”

この作業は言わばプログラムを創るのと同義だ。

ソース文を書き、コンパイルし、エラーが出なかったのなら、実行する。

それと、同じ。

サードシステムと同期し、コピーを作り、サードを除去する。

そしてそのコピーに新たに書き込み、エラーがなかったから実行した。

それまで。

魔法書のページが根元で全て破れ、ざあああああ と彼女の周りを舞う。

ページ一枚、裏表、各所に魔法陣が描かれている。

つまり、上下の魔法陣だけではない。四方八方のにも魔法陣が出現しているのだ。

それは、高密度の結界をなす。

世界が繋がり、世界を繋げ、その繋がりで

世界を壊す。

クレアのすることだった。

いや、したことだったのだ。

彼女　　ルールフォータスは目撃した。

身体を蝕むモノが脳に達する直前に、世界が壊れた光景を。

空白 になった。

世界が壊れ
レアは死んだ。

、
ク

「曖昧」模糊って何回も言っていると『アイマ』『イモ』っていつ名前にならな
《現実》

私はクロエ=A=シャヴァリエ。

ごく普通の家庭に生まれ、

普通に育って、勉強して、恋をして、運動をして、魔法を使って、

ただ、普通に生きている。

私の周りなんかで人は一度も死んだことが無いし、動物にいたって
も死んだのを見
見たことない。

普通で、幸せな生活

そう、

異常で、死逢わせな生活 とはかけ離れている人生の境遇の境界線

凱旋するものは福。

倒壊するものは不幸。

絶倒の夢。

嗚呼、私はコレを望んでいた。

稲葉の白兔のような淡く弱く儂い夢を。

『傍観』を決め込む事しか私には出来ない。

『儂』く、それでいて濃霧のような『夢』だ。

悪夢とも言えなくはない。

纏わりついてくる。

自らが望んだことが悪夢だなど、滑稽なことだ。

…アレ？私は世界を壊したはずなのに、どうして夢なんか視てあるのだろう。

世界という概念に、別の世界の本質をぶつけて壊したはずなのに、ドウシテ？

” 死んだ ” ではなく ” 壊れた ” のだ。

” 壊れて ” それだから ” 何も残らない ”

世界の理を度外視して。

って、え。

おかしいって。

おかしいって。

可笑しいって、可笑しいって。

オカシイオカシイオカシイオカシイオカシイオカシイ

。

なんで、自分は、自分の概念は、自分の精神は、自分の
は、ここにあるのだろう。

なぜ意識できるのだろう。

失われたはずの肉体が、魔眼が、私に在る。

どうして。

早々に焦燥感に駆られる。

ドクンっ。

これはッ!?

ドクンっ。

私の見ている世界が歪曲する。

私の思考が雑踏される。

『魔眼の能力』

しか考えられない、

恢這の魔眼。

私は自分の肉体がここにあると感じている。

確かに。確実に。

ならば、これしか考えられない。

クソっ、

組み替えたはずのシステムが、クリエイト瞬時刹那に組み直されたされた。リクリエイト

魔眼の能力で。

私は世界と世界の概念をぶつけ、壊す事が出来なかった。

寸前で、届かなかった。

この眼は、私の存在のみを世界から消した。

それは只の先送りだ。

私のような存在を生み出す先送り。

私は私のような呪われた存在を生み出すこの世界を、壊すためだった。

なのに、この眼は、世界と人々から私の記憶と存在の身を奪い、その世界は私の抜けた穴に私と酷似した概念を持つ人間を後釜に入れた。

そして、私の今の状況。

夢……だと思っ。

私はシャボン玉のような光沢があり、光を七色に屈折させるような新円の膜に覆われている。

夢の世界。

いや、私がいた世界を別の視点から視ているのだ。

この眼で。

恢這の魔眼の能力。

「セカンド・サイト世界の透可視」

それに、この状況。

私は 自分の眼に『囚われた』。

「キャプティブ・ホールド自己囚々機能」

私は。

私の目的は。

まだ達成されていない。

まだ、登場人物は他にいる。

この世界ではない 違うところに。

さあ、まずは時間をかけなければ。

自分の、恢這の魔眼の能力を、

読み解かなければ。

そのための時間と、もうひとつ。

恢這の魔眼のもう一つの名を私は今、ここに示そう。

『采配されし蒙昧者の生きし擬眼』

『レヴェルイーター』

と。

「ノイズ」を観れる機械ってオシロスコープとか？

《モクテキ》

『名前』が無いんだね。『ど』『う』『り』『で』『こ』『の』『世』『界』『が』『そ』『こ』『ま』『で』『二』『人』『を』『拒』『絶』『し』『な』『い』『は』『ず』『だ』『よ』『。』
《喰》《べ》《ら》《れ》《ち》《ゃ》《っ》《た》《ん》《だ》
《ね》《。》《可》《哀》《想》《に》《。》
教えてあげるよ。それならあたしを見逃して欲しいな。これは約束でなく契約。どうか、

『名の無い彼と名無しの彼女』？

怪物は言った。

これはただの確約。契約。約束ではない。

怪物は言った。

名前を教えると。

俺は、今…迷った。

俺と彼女には××がない。

この言葉は呟くだけで頭にノイズが走る。

ノイズと言うより、もっと毒々しい感覚。眼をつむりたくなるよう
な。

だがソレを彼女は呟いた。

それほどまでに恋焦がれていたモノ。なのだろう。

「名前を喰われた記憶は無いみたいだな。名前を喰われた者は、記憶の欠落に苛まれる。名前を思い出そうとすると、思い出そうとする名前を更に見失い、それがループする」

怪物は、当たり前のことを言う。

俺たちにとつての日常を、当たり前のように言う。異常を通常に。

「うん、そうだよ。で、そんなことはどうでもいいんだよ。あたしたちの名前　　知っているのか否か。それが聞きたいんだ」

彼女は言う。現実師の彼女。

とてつもない殺気が漏れている。

「『一名前を食べる能力を持つモノ《ビィ・イート》』こいつの作業だ。

名前なんて言う、その存在が『どのように』『どうやって』などと人生を記したものを食べれる容量を持つものは一体しかない。

なぜ、我々は、いつ我々は、出現し始めた？」

質問がすり替わっている。

だが、核心に近づいているのがわかる。

ちらりと彼女を見る　　、彼女の口元が動く。

「開示」

と。

ありつ、かなり焦ってる様子だぞ。

無理やりに口を割らそうとしてるのか……もしかして。

まず　　ッ。

「止め」

「ギ、ガグエホスゴイスフブ

、我々は百年前から出現し始めた。なぜだ。それはどこからから一つの丹具が出現したからだ。それは、見たモノを取

り込み、永遠の呪縛を与える存在だった。そして、丹具は眠った。丹具は出現したときは膜につつまれて世界を五分視たとされる。だが、その五分で、世界は在るべき姿からかけ離れたものに変貌を遂げてしまったという。そして、近くにいた生物は皆、我らの如き、我らに近似した存在と囚われてしまった。コレが、我らの出現の事実だ。それから、丹具は瞳を閉じ、眠るかのように溶けたという。

そして、一度だけ。数年前、丹具は再び出現した。この時に、全九天の六番目が生まれたとされる。

その時だ。その時に、おにーちゃんとおねーちゃんは名前を奪われたんだ。

丹具の瞳に宿る邪は魔魔眼だ。

そして、我らの初期のモノは生まれたときに見たという。瞳の色を。

『赤』

だった。そして、その見たものは、自らの名前を失ったのだと伝えられている。

『第墮天、サーイグナ』

は、名前を失い、囚われてしまったのだと。

初めての、レヴェルイーターという存在を超えた存在を、その時に生み出してしまったのだと。

『サーイグナ』はその後、死んだ。

丹具の瞳により、殺された。

丹具は 支配した。

堕ちた、その目で墮としたモノを支配した。

『サーイグナ』は魔眼により発動された魔法陣からの高密度のエネルギー砲のようなもので焼き切られた。

話がぶれた。

精神は反抗したのだろう。
矛盾が起きて分離している。

空間がグニャリと歪み、どぼんっ
と体液まみれの何かが出現した。

「病」は気から、その気は人から、人は 人から、人から 人へ。

《埋没》

「ヤマノヒヨウ 病病」

彼女は言った。イオウと言われた彼女 赤皿藍理。
彼女も持っていた。

『病病』と呼ばれるモノを。

深い紫の腕輪 彼女の右手首あたりに嵌っているソレは、先に
使用された鬼擬と同じ、いや、それ以上に普遍を瓦解させた。

藍理は右手を前に翳す。そして、押す。ゆっくりと、重厚の扉を押
しあける仕草。

ドロリ と目の前が溶ける。溶けて 融け 溶けた。

腕輪から発せられた化学薬品の化学反応によって発生した煙のよう
な『本質』は空間に浸透して、そのあとは 。

「…流石。じゃあ行こうか」

「いいけど、一応言っとくよ。今から入る空間は半分以上所有権を
放棄しているよ。巻き込まれないように気、つけてね」

「おーけい、おーらい」

二人は溶けた空間の内部に入った。

「 つ、…あんたらはっ!?!?」

「 つ、…あなたらはっ!?!?」

彼と彼女の眼の前には体液まみれのレヴェルイーターと、男と女の二人の、一組の男女がいた。
彼女の足元には 苦痛と苦悶でゆがんだ見る影もない怪物が、死んでいた。

「キミ、怪物の次は 同業者…っぽいのが来たよ」

「そりゃあ、まあ見るからにそうだろうな。女は右手に『魔剣』、男の方はポケットに『幾擬』と ありゃ、これはやべえよ」
男の方は何故か二人の所有しているモノを言い当てる。その答えは一つの事実を示唆している。

「あんだ、この空間の所有者か？」

維祐は彼に聞く。おそらく、維祐の見込みでは『自分を含めて一番次元を突破している』であろう人物に向けて。
旧知の仲の 人物に向けて。
数年前、突如として姿を消した 人物に向けて。

「なんで、どうしてなのっ!?!」

藍理は驚きを隠せない。藍理の癪 ではないであろう、何かで藍理は感じ取ったのだ。

彼女の、彼女に芽生えた、彼女が持っていなかった異質に。
旧知と呼べない 友に向けて。
数年前、約束の場所に現れる事の無かった 友に向けて。

「「どうして、ここにいるんだっ!?!」」

彼らは、彼女らは、目的を一瞬で忘れ、忘却し。

人知を超えたモノを使って普遍を瓦解させた彼女ら、彼らは。

普遍によって瓦解させられた。

能動により壊し、受動によって壊された。

まさに ソレ。

その問いに回答した彼女、彼は同じく等しく答えた。

「
」

……ダレ?」「
」

「オミクロン」とは何文字でしょうか？（問）　いいえ、イスラム語です。（回

《男側》

赤皿監理と苛納陀維祐は、彼と彼女が××を失っている事を
知る由は無かった。

だが、ソレを俺が知っているわけがない。

「……ダレ？」

俺は真に心から思った。ダレダ。

同業者　　、いや、同族者で有ることは確かだ。

だが　　彼らの反応は常軌を逸している。

常軌を　　逸脱している。

この　　彼らは、『俺たちについて何かを知っている』。

状況から鑑みるに恐らくは　　レヴェルイーターを追い、ここま

で来たと言ったところだろう。

「……ダレって、忘れたのか？俺だ、苛納陀維祐　　コードオミクロンだ」

「はあ、オミクロン　　かなり痛いね。ドコの惑星と交信してん
の？教えてよ」

「なっ、お前…本当に覚えていないのか？
イフシロン　ヴェータと言われたお前が」

「……あ、ああっ、あああっ、そうだった、そうだった。俺は『イ
フシロン　ヴェータ』と『言われていた』なっ」
ここは話を合わせとけ。

「えーと、『イプシロン ヴェータ』はそっちが言い出したんだけど……あ、ゴメ」

俺は一体どんなキャラだったんだっ!!
痛すぎんだろっ。

俺の今までの設定ならもつとまともでスティックなキャラだったはずなんだけど。

一瞬で倒壊したああああああっつ。

「あ、ああ。そうーだったっけな。まあいいや。オミクロンはコイツを追ってきたのか」

「追ってきたというよりはもつと攻撃的な表現が似合うんだけどな。まあ、そんなところだ。ソッチのソレはお前がやったのか？」

「やった」

「やって、殺して、聞き出した。俺たちの目的に必要な情報を」

「目的？」

「気にするな。気を付けるな。恣意的すぎる目的だ。目的は元々恣意的で自己的なモノなんだけど、コレはそれ以上だ。だから、『俺と彼女には関わるな』と、言わせてもらおう」

「っ!?!いきなりどうしたんだ、そんなに意気込んで」

「……………な」

「ペラペラ」って意味合的には三つくらい含んでるよね。

《女側》

赤皿藍理と苛納柁維佑は、彼と彼女が××を失っている事を知る由は無かった。

だが、ソレを私は知る術を持つてはいなかった。

あたしは弱い。

あたしは強くない。

あたしは最弱。

あたしは最強の逆位置。

あたしは弱
『かつた』。

仏人の中でも最弱を『名乗れる』程に、

「

…ダレ？」

あたしは突然、普通じゃあり得ない力を行使してこの空間に入ってきた彼女を見据える。
どうしてだろう。

彼女はあたしの事を知っているようだった。

どうしてだろう。

あたしは少し懐かしい気分になっている。

これは、周りの雰囲気に乗せられているだけなのかもしれない。
だけど、『どうしてだろう。』

言葉では表せない、不思議な感覚に不意をつかれた。

喉まで出かかっているのに、どうしてだかわからない感じ。

只でさえ曖昧なデジャヴをもっと曖昧に、グチャグチャにひっかきまわした感覚。

視覚で認識できる感じでは、コピーの上に垂らしたミルクの波紋のような。

いけない。

今はそんなことを言っている場合ではない。

「仏ノ組織 代物支部 部長 赤皿藍理 コード、覚えていないの、印人のくせに。どうしてあの時こなかったの？」

イオタと言われたところまでの会話は理解できる。『その知識は記憶に在る』。が、その先の言葉は理解できなかった。単純にあたしに記憶が無いからだ。

あたしの印象では、『口うるさい仏人』だった。

はっきり言って、どうでもいいい。

おっと、いが一つ多かった。

このいよりもどうでもいい、

関係してほしくない。

面倒に話がこじれそうだったから。

それに、こちらから話す事なんて無い。

キミはどうやらペラペラと目的とか情報とかをパラパラと相手に与えているようだけど、こっちはそんな余裕はない。

目的が、

今まで存在しえていなかった目的が、

やっと、ようやく、遅咲きで、

『見えたからだ。』

ちよつと違うか。

『現れたからだ。』

そうだ、こうだ。

とにかく、

すると彼女の脛が滑り台に潤滑剤を塗りたくって滑るように両目を覆った。

無力化完了。

さあ、邪魔者は処理した。

さっさと探しに行かなきゃ。

キミの方も終わらせてあげるよ。

「『ピットドリーム現実放棄（能動）』」

「生殺与奪」 最低だ。

《暗迷ノ心》

何を言っているの？

どうしてそんな目で私を見る？

その背後からうねっているモノは何？

まるで別次元どうしの会話だった。いや、会話として成立していない。けれど、私からの会話は全く無視。相手にしないという表現でもすこし足りないほどに。

彼女の眼は 私を見ていなかった。

彼女の眼は 別のものを見ていた。

彼女の眼は 酷く濁って淀んでいた。

彼女の眼は 人の眼とは思えなかった。

計り知れない、直接対峙してしまうと飲み込まれ、内から食い破られるほどの殺気 怒気をはらむ視線。

まさに 死線。

視線 死線 私選 死を結ぶ線。

足が、指先が、下顎が、眼球が、皮膚が、血液が、白血球が、赤血球が、魂が、脳が、筋肉が、膝が、肘が、大腿骨が、五臓六腑が、奥歯が、舌が、喉が、息が、

震える。

いや、実際には震えない。だが、『震えない』のに『震える』と誤認させてしまうほどに強烈 なものに私は脅えている。

まさに、脅怖。

『強』いられたのではない。

『脅』えるのだ。私が、勝手に、自分勝手に、唯の視線で、自己的に、わざわざ、文字道理の意味で恐縮する。

もはや『以前の彼女ではなかった』。

私を知っている彼女はもつと普通だった。

人間じゃなくて仏人。

普通じゃなくて異常。

人間視点では異常。

仏人視点では普通。

これが彼女の私による認識だった。

だが今はどうだ。

仏人の私から見ても異常。

異常を突破して異常。

異質を突破してもはや壊滅している。

いや、瓦解している。

まるで、私の持つ『病病』という名の『魔剣』のように使用するだけで普遍を壊す。

それと同義。

それと同等。

それと等価。

おそらく彼女は私が空間を、普遍を瓦解させたように、私を『瓦解』

させるのだろう。

弱肉強食。

違う。

言葉の意識が弱い。

もっと、『太刀打ちできるわけがない言葉』を。

そうだ、

まさに『蛇に睨まれた蛙』。

いや、すこしニュアンスが違う。

もっとシャープに、シンプルに。

そして、私の脳裏には案外あっさり一つの言葉が出現した。

それは私の生体本能や野性や本質が打ち出した
至極当然の言葉だ。

《生殺与奪》。

確信して革新が起きて核心を私は掴んだ。

だから、太刀打ちをするために、いや、そんなことももはや私はどうでもいいのだろう。

どうかしてこの状況を脱さなければ。

その一心で喋る。

「仏ノ組織 代物支部 部長 赤皿藍理 コード (イオタ)、覚えていないの、印人しんびんとのくせに。どうしてあの時こなかったの?」

違う。

違うっ

t o b e c o n t e n u e d

「生殺与奪」 最悪だ。

《決断ト時》

「…違う」

私は、ようやく声を絞り出す。
儂く 消えてしまつ声で、言う。
断言する。

『違う』と。

私がするべきことが、『このようなことではないことに』。

「誰だか知らないけど、《拒絶》させてもらうよ。あなたの言葉は私には『届かない。』それほどにあつたかどうかも分からないあしたたちの関係は《断絶》しているんだよ」

と、断言が断斬される。

たった一行程度の言葉に。これ以上 何もいえなかった。
知ってしまった。

彼女は完璧に、100% 変わり果てていることを。

これでは 何も、出来ない。

だから、この程度の戯言しか言えない。

『それってどういう意味？あなたに私達との記憶は在るの？』

絶叫 出来ない。

この程度なのか 私は。

弱いなんてものではない。

鈍いなんてものではない。

幼稚なのだ、所詮。

くっ、意識が……遠のく。

極寒の、暗闇に、堕ちてゆく。

どうすれば 無理か。

『無理なんだ。』私には。

だから、 『魔剣』を使おう。

そして、『魔剣』に遣われよう。

意識が鎮静する中で、一言を 心の中で言っ。

『喰らっていいよ

病病』

ワタシヲ、人外へ、彼女と同じ、ステージへ、連れてって、タノミ
マス、

彼女を……タスケルタメニ、

それに、彼女の胸の内の悲しいまでの言葉に、呼応するように、恋焦がれるように、

『魔剣はひいんと光る』。

極限の、極限に小さい光。

それが、それが、『病病』が、行った事。

すなわち、すなわち。

人から仏人、仏人からの昇華。

私は、彼女を手伝おう。

まず、その一歩として この状況を打破するために、

必殺の 一撃必殺瞬殺の存在として君臨しよう。

彼女の、藍理の手首に嵌っている紫の腕輪はドロリと溶けだした。

それは意思のある生物。

そして

「最初」から始めるで。

《イキカタ》

俺　　苛納陀維祐の人生を翻訳するとただ一つの単語になる。

こういった前置きをすると、どこか奥が深く霞がかかって見えないような感じの小説、推理小説、伝記小説、エッセイ小説のような雰囲気ができる。

別に俺は、そんな戯言のような迷言をほざくつもりは毛頭ない。

であるから、一つだけ、一つだけ俺の心の内を取り上げよう。

今、俺は、俺の、両肩は、地面に、落ちて、下半身は、眼前に、倒れている。

彼が『リバーシブルワールド』と言ったところまでは『覚えてい
る』。

だが、彼が右手に不快な剣を出した所を視覚情報として脳が認識したところで、視界がずれて、意識がぼやけた。

ぼやけて、ぼやがかかり、かすんで、霞がかかった。

そして、　　バラバラ殺人事件が発生したようだった。

だが、ここで一つの問題が発生する。

それは、俺がこうして何の障害の無く、雑念の無く、『思考』できているという事。

これこそ、これこそは、最も重要な点だと思っべきだ。

なぜならば、『身体』が『ばらばら』であり『血』が吹き出ている中で、『俺は痛みを全く感じていない』。からだ。

オカシイ、おいつ　と突っ込んでもいい。

感覚が麻痺している　とは考えられない。そうであれば、脳
の感覚も麻痺してこう思考できない。

だーかーらー、『気持ち悪い』んだよ。

幻想である幻術なのかもしれないが、受けている俺にはソレは理解
できない。

雪山で雪崩にあつて、雪に埋もれてしまった人間には方向感覚が無
いに等しいと同じだ。

受動側は、『理解できない』。

だから、

持ち悪い。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、
気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、
気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、
気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、
気持ち悪い。

「つぶやく」のはツイッタ だけにして下さいお願いします。

《ゼンタイ》

「糞」が接頭語として付くほどに詰まらなく、締まらない話が始まった訳なのだが……、僕は結構好きな物語であると思う。

互いの理念が回折して屈折して反射して交錯して交差して隊列を組めずに捻じれあったこの状況。

「迷走」とも置換可能だろう。

彼と彼女と 維祐と監理。

彼は殺しを望む。

彼女は名前を望む。

維祐は理由を望んだ。

監理は何も望まず 託した。

ここいらで一っ『断言』しよう。

維祐と監理は死ぬ。

何の一边倒もなく、只無残に露骨に暴露的に露呈して殺される。

抵抗　　はスルだろう。だが、抵抗『出来る』だけであって抵抗が『成功』するとは到底考えられない。

だが、一撃はきめることはできるのだろう。

彼　　維祐の懐刀である『刀隸』は、神鈴の部類に含まれる天矛属刀と呼ばれている類のモノなのだろう。

属刀とは名が態を現すように、『その刀の対象となったものに強制的にその刀の保有している属性を植え付けることが可能な能力を持つ』刀だ。

そして、刀隸はこの世界を構築した神に『神属性』以外の属性『隷属性』を与えかけたと伝承に残るほどの歴史が残る刀。

効果は　　壮大で絶大。

なのだから、せめて反撃は出来るだろう。

まさに窮鼠…猫を噛むだ。

いや、その前に猫に噛みつかれているのだが、おや？

あー、これはこれは。

仏人のくせに飲み込まれてるよ。

禍々しい　　いや、曲々しいな。

子供の遊びじゃないんだから、怒って、望んで、モノに頼るのは良くないな。

僕としては共存ってあたりが及第点だったんだが……、この空間は熔けるんじゃないかなあ。

あの様子じゃ、手首に付いていたはずの魔剣が、　　あちゃー、こりゃやばい。

『魔剣』が『魔憑』になりかけてるじゃんつ。

これは、いくら僕でも手に負えないな。
とり憑かれたら、とり憑かせたら『戻れなくなる』。
もしくは初めから戻る気など更々無いとか…、阿呆か。

「自分の存在を簡単に見すぎだ。価値を楽観視するな。僕を見習え
って」

僕は独り言をつぶやく。粒粒の入ったゼリーを食べながら、つぶやく。

ええ、嘘です。

でも、この調子じゃ……新約レヴェルイーターの誕生とか
なりそうだな。

「冗談じゃないぞ。第六天でも手に負えないのに、仏人がレヴェル
イーター化とか、正気の沙汰じゃないだろ」
自らの言葉の意味を噛みしめて、心の中で復唱する。

「こつちの『世界』へ『アイツ』を探しに来て幾許か経ったけど、
ここまでの事態は初めてだなー。どんな事情があつてこんな事態と
変化したのか、昇華したのか分からないけど…まずあ引き剥がしま
すかー」

『エクスプローア
探査』を解除つと。

ラルド。フル。トイト。『トランスファ転移』…えつと、ポイントは……、『イ創
マシンエリ
造空間』で。「

そうして、彼は転移した。彼の眼が良くなって良くなりすぎて悪く
なってしまうようなそんな緑の純色のローブを身に付けた変人
変態だった。

ローブの周りの色が一瞬明るくなったかと思う頃には、その姿は跡形もなく、消えていた。

彼のローブには一つの刺繍が。

紫陽花の刺繍が緑の糸で入っていた。保護色のように。

魔術アルカナフィンディ学院 第11年、特別劣等生に与えられた唯一の『色』。

『緑』。

恢這の魔眼をした彼女 クレアと同期の魔法使いにのみ与えられた、最悪の色。

侮蔑の色。

『緑』。

単純計算で百歳は超えている 彼。

物語の登場人物が一人追加し、いよいよ始まる。

プロローグは終わったのだろうか。

そろそろ入るのだろうか。本編に。

だとしたら、だとしたら

。

「つぶやく」のはツイッタ だけにして下さいお願いします。(後書き)

こんにちは、こんばんは、おはようございます。

あいさつの順番は、今この執筆は昼にしているので、順番的にです。最近どたばたと忙しく、西尾維 さんの新刊本や既刊本を読みあさったりして、どうも埋ピーシーを起動する機会がなく、あまり執筆できませんでした。

すいませんっしたあ。

と、言う事で、物語です。

傾く物語です。

「傾 語」です。

今回もサイコーでした。

貫徹してしまいましたね。

三時間ほどで一度読み、もう一度見返して四時間見ました。

え、二回目の方が多たって。

あたりまえじゃないですかー。

じっくりとよんだんですよ。

と言う事で、謝罪文と、感想文でした。

コレを読んでくれた人は西尾 新に少しでも関心を持って既刊本を読んでもくれることを期待しています。

読んでいる人は、あーそうそうといった感じで共感してほしいです。ではロリかけー皆さん……失礼、噛みました。

物語ネタですっ。

じゅんじゅん。

「留守」番電話つて声吹き込むの面倒で人生で一度もしたこと無い人拳手―

《プロローグノナカ》

『刀隸』……だと。

彼はそう独り言を吐き、まさしく眼下の位置に位置する維祐を見下ろす。

在り得ないといった様子で。

見下ろす。

当然、ソレはあり得ない事態であるのだろう。

彼の中の知識では、刀隸は壊れているモノだった。属刀の中で唯一神に届く一振りとして崇められ、狙われ、そして最後に破壊された一振り。

神属性に隸属性を加える刀。神によって破壊された刀。神が恐れた刀。斬れば斬るほど強くなる刀。そんな刀を維祐は所有していた。

五体不満足で、両肩、上半身、下半身に斬られて腕を動かせない肉体で刀隸をだした。

いや、『出した』。

胸の鳩尾の上側辺りの中央から、にゅーと生え出た。

柄から、鞘と。

そして、何もしないのに鞘からひとりでにその歪な刀身をのぞかせ、自らの両肩と下半身を軽く斬る。

すると、両肩と下半身は奴隷のようにひとりで動き、上半身に接合した。

この間、一秒か二秒。

物凄い早送りだった。何もできずに立つ、彼。

呆然、唾然、毅然、当然。

クリーチャーやら何やらを創造させる…再生の仕方だ。

『自ら』の肉体に『隷属性』を与えて、中枢部の背骨に繋がるように使命を与える。頭脳が無いのだから『絶対に裏切られることが無く、絶対的な従順』を与える。

だから、接合したのだ。

だが……、遅い。

一つのことばかりに集中しすぎて別の事が起きるときに対処が遅れる……と言つ事はよくある。

だから、『忘れていた』。

彼の使用したリバーシブルワールドの効果を。

維祐からでは未知の能力。リバーシブルワールドを忘却していた。

「それで……、どうした。遅いんだよ、死ね

アイ…『虚^{ウツロ}」

鯨^{クジラ}「

彼の右手にはいつ出したのか分からない、どこに持っていたのか分からない、不快な刀が握られていた。もしかしたら、維祐と同じく体内に収納していたのかもしれない。

五体満足を取り戻して、短く息を吐きつつ下半身に力を入れ状態を起こそうとしている維祐の首元に狙いを定め

ヒュンツ、と不快な刀を振るう。

不快な刀：それは形状や全長や色合いなどは普通で何処にでもありふれた日本刀だが、『精神的に異常を掻き立てられる』ような気分を見ると思ってしまうような刀の事を維祐は言っている。

バギンツ！！

刀隸を右手で握っていた維祐は彼が虚鯨と呼んだ日本刀を受け止めようとする……が、右手で握っている程度で両手でふるうべき日本刀を両手でふるった一太刀を受け止めることができる……わけがない。

刀隸の刀身は柄から数cmしたところで歪に折れ、ナイフより短くなって折れた刀身はどこかへ飛んで行ってしまふ。だが、それだけで刀の、虚鯨の達筋を変えることは出来なかったようで、勢いを殺せずに刀身は維祐の右の頬骨のあたりをざっくりと斬り裂く。

「あぐうううううう！！！！」

骨と肉をえぐられ、芯から痛みのもつた声で喘ぎ一瞬 身体をこわばらせその場で痛みで顔を伏せようとする。

更に連撃 追撃 突撃 一刀両断。

華麗に彼は虚鯨の切っ先を捌き、維祐の急所 眉間や首元を狙お

「エジプト」風のBGMってテンションあがるよね。あつ、コレなんかエジプト
《過去ト家族》

俺、苛納陀維祐の人生は設定集であると言える。これは重複した文章である。

小説のキャッチフレーズには最適だなー。いや、差異的な内容になるかもけどな……、そこは御愛嬌。

とまあ、こんな感じだな俺の人生。

あと数秒いや、一瞬で死んじゃうもん。

もう駄目、全然だめ。痛みで涙が出て滲んだ視界の端では不快な刀が俺の首をはねようとせまって来てるもん。

もんもんっ。

あー、コレが走馬灯的なあれだね。物凄い体感時間が遅くて、思考が加速しまくってるじゃん。

あー ……死にたくねえな。

俺、苛納陀維祐は苛納陀維性質イタチと苛納陀裕焼ユウヤケの間に生まれた二男である。

俺の兄は苛納陀性焼シヨウシヨウである。

この三人は『俺の最初の被害者』である。三人もいて最初とは何とも可笑しい話だが、まあいい。

俺は生まれた時から仏人であった。仏人の両親と兄。

当然、俺も仏人としての人生を授かったのだろう。

だが、問題はそこではなかった。維性質は放浪家でありいつも旅をして、裕焼はレヴェルイーターにのみ関心があり、それ以外（維性質は除く）の事には無関心だった。

そんな家族だった。

だが、いつからだろう。もしかしたら初めから、俺が生まれてからだったのだろうか。

維性質は放浪を止め、裕焼は俺たち兄弟に関心を持つようになる。まるで、人間の『設定』を付けくわえたように、ロボット三原則のように、俺たちに関心を持つようになる。

維性質は絵にかいたような母を。裕焼は絵にかいたような父をするようになった。否、させられていたのだろう。

俺によって。

赤ん坊だった俺には普通ではあるはずの無い仏人としての特性があった。

そして、『血のつながった最も濃い関係を持つ両親には相性が良すぎたのだろう』。

恐らく、俺はその時に設定したのだ。

俺が小学一年に上がったころ、妹が生まれた。

苛納陀質。カハリ

俺の特性は特に兄には向かなかった。俺自身、兄をそれほど望んでいなかったのだ。

いてもいなくてもいい。よき兄でも悪き兄でもよい。その程度の認

識。

このころはまだ無意識だったから、幸運だった。もし、今コレを望み設定を与えてしまったらどう傾くか分からない。よければそのまま、悪ければ消える。

だが、妹は違った。

質には自分^{カハリ}のことを好いていて欲しかった。

この時、俺のこの願いで設定を変えてしまったのだろうか。

妹に好いてほしい、妹は俺の事を好かなければならない。

好くという事はこの当時の俺は俺の為に尽くし、俺の好いた相手の為に尽くす事だと思っていた。

全く、子供っぽい華奢で幼稚な考えだったと再確認する。

仏人としての使命の対象　レヴェルイーターとの遭遇は俺が中学に入って起こった。

レヴェルイーター＝アメンという敵。

俺たちの家を襲撃した敵　だった。

完全な不意打ちで何の前触れもなくソコに現れていや現れたわけではなく、両親の首が一瞬で飛んでから敵だと理解した。

「姿の見えない」敵。

アメンと云うのはエジプト神話に出てくる「不可視」の『神』である。

『不可視』。

どれほどコレが恐ろしくどれほどコレが戦う事が難しくどれほどコレが最強かを俺はここで認識した。
不可視は血に濡れたからそこが見えるなんてことはまずない。
見えないのだ。血に濡れているのに見ることが見えない。

兄も死んだ。無残に心臓を貫かれて。

その次は 俺だった。足がすくんで壁にもたれかかって動けなくて、身体が震えて。
格好の標的だった。

バキリと床がへこみ、俺の方へ徐々に近づいてきたのがわかった。
多大なる脅威が覆いかぶさってくる。自分が死に首まで浸かっているのが分かった。絶対的に死を下される。
はずだった。

意を決して眼を瞑り、死を覚悟した のに死は訪れなかった。
眼の前には妹の無残な死体が視界に広がっていた。

理解した。

自分がしたことを。

理解した。

自分の欲したことを。

理解した。

自分の特性を。

理解した。

特性の使い方を。

理解した。

相手の殺し方を。

立証した。

レヴェルイーター・アトンを殺した。

設定をして不可視を可視にして。

自らの胸から出てきた刀隸で。

殺した。

走馬灯はこれで終了だろうか。

最も印象に残っている事が……コレか。

複雑奇怪だな。

さあ、もはやあかくことはない。

死のうではないか。

死だ。

まだ、気持ち悪いが仕方がない。

刀隸は「遣った」が、いつ来るかわからない。

万事休す。

ほんじゃあまあ、さよーなら。

「ヒール」で踏まれたらそこだけ痣になりそう。案外緑色だったりして。紫色を

《絶対領域》

端的に言おう。『間に合わなかった』。

絶対に避けねばいけない所を、失敗した。

失敗。

大失敗。

僕の力も劣化したもの。刀の一太刀も弾くことが出来なかったなんて。

いやいや、そんなことを言っている場合じゃない。

こんな茶雑な事を言っている場合じゃない。

だが、まず僕がしないといけないことはここから……だ。

分かり切ったことをするのに失敗はいらない。

僕は　そう思っていた。

トランスファした先は彼が片方の首を飛ばしそうになっている刹那

だった。

つまり…挟まれちゃってるってこと。

つまり…僕の首も飛ぶ可能性がある。

つまり…刀を受けなければならぬ。

彼の振っている刀を見る。

見て。

視る。

鎖に繋がれたように彼の動きは劣化する。遅くなる。

いや、この眼の能力。
ではない。

ただの『魔法』だ。

『体感時間を自由自在に伸ばす事が出来る』魔法。

学院一の劣等生だった僕に与えられた色

緑。

緑。

視録。
ミドリ

視盗。
ミドリ

その意味は魔法使いにとっては、魔法を使役する者にとっては……
最低最悪。

まあ僕としては最高最善と言える天衣無縫の意味なんだけど。

『永遠』。

永遠を司る色。
じゅうえん

永遠を掌る色。
じゅうえん

永遠を彩る色。 永遠を蝕む色。

永遠に変わらない 色。

僕に与えられた称号は僕の魔法を体現する。

体感時間を自由自在に伸ばす事が出来る魔法は永遠に通じる。

永遠は さらなる永遠に通じる。

体感時間を自由自在に伸ばす事が出来る魔法は、時間の単位を侵蝕
する魔法に通じる。

僕の眉間をカチ割るように振りおろされている刀を峰の部分から押さえ、握り込み、捻り擦じり上げるように勢いを逸らす。返す刀で体術を。

こっちには一方に対する敵意は無いので軽く右ストレート。軽く相手の頬を打って軽い脳震盪を起こさせる。

背後で呆けている阿呆に裏拳（回し蹴りだけど…）を首元に食らわし昏倒させる。

「はい終了ーっと、はい終了ーっと」

さあメインディッシュだ。

昨今の漫画にはこういった展開のモノがある。

ある抗争中に第三者が強引に　だが優雅に割り込み、その抗争を一人で鎮静・鎮圧させる。

こんな展開。

王道な展開。

僕は大大大大大（えーっと、何回大って言ったっけ。）大
好きなんだよな。

だから助けに入っちゃう。

どちらかの味方でもない癖に助けに入っちゃう。

いや、助けるっていう表現がいけないね。

手打ちに入っちゃう。もしくは両方を殺しちゃう。

「キミは誰だよ、私の領域であるのに全く『解析』できない。そんな能力見たこと無い」

あなたは一体　？

と彼女は言う。

僕の探知魔法では　、

『現実師』と呼ばれる最弱の能力を持つ彼女。
幼稚な幻術を使役する能力の名称が現実師。

現実師は最弱の能力で一般人の一人も殺せないだろう。
ならば、どうして彼女はここまで強いのだろうか。

その理由は分からなかった。

『現実師』とは現実を魅せる師ものの事を云う。

そしてその現実に魅せられた『者』は、

『その現実に取り込まれる』。

苛納陀維祐と呼ばれていた彼が豪くぶつ切りの人肉ステーキポークビッツになつたのはこの能力に魅せられたからだ…僕は考える。

現実師の第二の能力。それは恐らく空間の支配。局地的で閉鎖的な空間では自らの波長・波動のようなものを張り巡らせ、満ち満たせて自らにとても優位な状況を創り出すことが出来るのだろう。

だから微弱で最弱の幻術の能力が超強力な幻術の能力に化けて彼に魅せたのだろう。

彼女 赤皿監理も同義だ。同じく魅せられて眠ってしまったのだろう。

「僕は魔法ソーサー使いであり魔法ウィザード使いであり魔法ネクロマンサー使いであり魔法マジシャン使いであるがゆえの魔法ソーマタージスト使い。まあ呼び方は何でもいいよ。あ、ちなみに名前はシューマ・テトス。こっちの世界ではえーと、何だっけ。アイツは僕のことをえーと、呼んでたっけ。うえーと、太政灯屑だいじょうひくずだった」

そくだ。僕は太政灯屑と呼ばれていたな。アイツに。

すると彼女は豆鉄砲を喰らったような顔をして、「ブふっ！！」と噴き出した。

明らかーに馬鹿にされている。

「キミはさあ、私たちの目的を邪魔することが目的なの？それなら殺すけど、どうなの」

「僕は邪魔なんてしない。邪魔しないが僕の邪魔をしようとするだろウキミたちに苦言を呈しに来たんだ。ああ、けど僕は「答えになつて無い、なら私の敵ね。殺すけど　いい？」って話を聞こうよ」「うるさいって。そんな御託はどうでもいいから、黙って死ね」
「って聞いてないし。あーもー、僕としてはこんな展開はきらいなんだよ。キミにかまつている時間は無いってのにッ！」「せあああああッ」とうおあああああッ。僕は子供っぽい人の意見を聞かずに馬鹿みたいに一方的に見た手を立てて攻撃してくる奴が嫌いだ。僕は子供っぽい人の意見を聞かずに馬鹿みたいに一方的に見た手を立てて攻撃してくる奴が嫌いだ。つて三回言ってみただけどどうかな、落ち着いた？」「ふ、ぎ、け、るなッ！」だから効かないよ。僕にそんな現実。幻術で現実を魅せるなんてこ洒落ているけどそれだけであつてそれ以上じゃない。だから弱いんだよ、「うるさいうるさいうるさい」。ほらもうへばつてきた。ならもう黙れよ。阿呆が。イチイチ幼稚な子供みたいにあがくな。小童が。五十年も生きていない赤ん坊が。ピーピー喚くな。セリ。ソウン。アール。『泥眠』^{ロレグ}　ほうら泥のように眠れ」

彼女は　頭から地面にぶつ倒れた。こっちに向かつて来ている途中で眠つたから仕方ない。

いやー、それにしても彼女の幻術としての現実には強い。僕も危うくしゃべり続けていなかったら取り込まれていたよ。

それで　メインディッシュだ。

「ようやく第一章のエピローグが見えてきたつてところかな」

僕が抗争の中心に攻め入り、抗争自体を壊滅させる。

侵蝕。
浸食。
壊滅。
絶滅。
瓦解。
そして 分解。

さてと、アイツが目覚める前にさっさとこの最悪の状況を追われせなければな。

最悪の状況は一人。

もう手遅れだと思われる一人。

僕はその光景があまりにも凄惨で後ずさる。

もはや手に負えない。

取り込まれているのではなく逆に取り込んでいる。

どんな生命力だったの。

生命力で言ったら屈指のレヴェルイーターも神鈴を取り込もうとしたら取り込まれたんだぞ。

おまつ、もはや人間じゃない。

僕 死んじゃうんじやないかな。

冷汗ダラダラだよ。

あーちびりそう。

彼女は立ちあがる。

身体に紫の刺青のような模様が見える。

幾何学的な。

それ自体がチカラを持つような。

恐ろしい。恐縮。

いや、意味合い的には違うけど字面はあってるな。

右手には鉾石を適当に削ったような様々な角のある面を持つ無骨な

刀。

旧石器時代の動物を狩猟するために使われていたようなあの武器。あれを想像してもらえると分かりやすい。あれをもっと長くして、一メートルほどに伸ばして、紫色にして、柄を削って、取っ手を削って、刀身は先に行くほど細めた感じ。そんな刀。

名は体を表す。

『魔剣』。『病病』。

おいおい。

頬を汗が伝うのが分かる。汗は冷たい。

「病病いや、ナイフ刀病。やるよ」

ああ、その名前からすると『刀隸』を飲み込んだのか。だから打ち勝った。意識が。新しい属性を与えられて、意識がそっちに集中した。

意識の圧力が大きくなったから。

ヒールと同じ要領。

まったく。

「笑えない。笑える。笑えないな。グリーンゲルの僕でも」

省察ではだめだ。一気に決めないと。決着を。凄惨に笑おう。この世界の原点の立ち位置人間もそうだったはずだ。

この悪は捨てられなかった。笑おう。

「ヒール」で踏まれたらそこだけ痣になりそう。案外緑色だったりして。紫色を
どうも。

あけましておめでとつごぞいます。

水口秋です。

今年もどうか宜しく願います。

「囚人」になったら朝昼晩の飯がついているからそれはそれでいいかも。

《スクエル魂》

一度起こった事はもう変えることができない。僕はこの事実を実感している。

もはや変えようのない、事物。

還るべき処もなく、変えることも出来ない。一方的に　　手詰まりだ。

僕はまるで処刑される前の囚人の気分になってみた。

特に理由はない。

ただ、眼の前のあられもなく《終わった》仏人を見てそう思っただけ。

自我が在るだけにやりにくい。

引き剥がす事が余計に困難になる。

なんたつて痛いのだ。

コイツは魂と繋がっている構成になっている。

リンク。

互いにリンクしている。

ミュージアリーにリンクしているのだ。

だから　　難しい。

自我があるとその自我がボロボロに崩れて壊れてしまうほどに
痛いのだ。

「えーと、赤皿監理　　だったかな。一つ提案があるんだけど…僕
としては」

懇切丁寧に言う。

相手に不快感を与えないように。相手が不快にならないように。印象を…良好に。

「僕としては…？」

彼女は刀の面を肩に担いで暇そうに聞き返してくる。

暇そうと言うよりはどうでもいい、無感動と言った様子だ。

まったく、大人びているというか変にイキっているというか。

「僕としてはその刀病をこっちに渡してほしいんだよね。でもってソツチの魂から魂としての刀病を渡してほしい。どうか？考慮には値する？」

「しない」

即答だった。

まあ当然かな。

けど、一対一でこの状況。もはや交渉決裂のこの状態。ならば一つ。戦争だね。

戦争というよりは……戦闘かな。

「じゃあ始めようよ。その力の奪い合い。その魂の奪い合い。一つ言っとくけど、魂から刀病を引き剥がすときはめっちゃくっちゃいたいから。セリ。ソウン。アール。『泥眠^{ロケ}』 ほら、泥の眠りが近づいてるぞ」

僕は唱える。三段の初歩的呪文を。

これは波状攻撃だ。それを一方に絞っている。これで勝負は決まる。ぼくは思っていた。

魔法の概念を持たないこの世界の物質は魔法を打破することは不可能。

コレ世界ノ理。

だが、彼女はそれを斬った。

波動を、縦に真つ二つに斬った。

断斬。

うわー、我ながらネーミングセンスが厨二くせー。

移動魔法を使っているとしか言えないほど恐ろしいスピードで彼女は肉薄していた。まだ動いていない状態の彼女の残像が見える。そのくらいの速さ。

ゲール。ゴオ。ホイゲン。

咄嗟に頭の中で展開する。三段魔法の上級編。

「リクワ・フレイ液状化」！！！！」

勢いは止まらず、彼女の剣は僕の頭を一闪した　　ようだった。

唱えたのは自らを液状化させる魔法。魔法の中でも自らの肉体に完全干渉する系統は難しい。

レヴェルで言うと……いや、止めておく。

だが媒質は水。ならば結果は。

一目瞭然であり、斬られた部分は地面に落ち、また全体と繋がり、彼女から距離を取って現れる。

イヤ、まあ自分でしてる事だし客観的な言い方しなくてもいいんだけど。

まあ、なんとなく。(ちょっとメタだ。)

更に展開。脳内にだけど。

魔方陣を展開 構築。

使う要素は三つ。

自らを守る陣。

相手を無効化する陣。

攻撃を吸収する陣。

似通っているが緻密に違う。

頭で創った陣を自らの前面に展開する。

グインッ!!!

彼女はまた肉薄する。この魔法はそんなに長くは持たない。もって一分、さっきは十数秒だった。

確率論で動く魔法。

だが、今度のは違う。基本の要素を一つ、軸にして周りを構成する。

緑色の陣。

それが正面から彼女の刀病を受ける 否、受け切れなかった。

受け切れずに 破裂した。

犯された。多分、犯された。

緑が紫に変わって、ドロドロに溶けて霧散した。

そのさまは言いようがなかった。言い難い。

「おいおいおいおいおいおいおい、どんだけ物凄いなんだよ、ソレ」

「これで………終わり？」

そうだね。

「ああ、もう手の打ちようがない。魂との融合率100%とか、救い難い。だから、殺すさ。第一の種族、人間。第二の種族、仏人。第三の種族、レヴェルイータ。に次いで、第四の種族になっているからな。もう無理だ。だから、謝るよ。ごめん」

「いや、謝られても……って、第四の種族って、どういう意味？」

「仏人と何かのハーフの事だよ。物凄い能力を持っている種族。全九天を一人で滅ぼせるほど強い」

「あーね。確かに今なら第六天もあたし一人で殺せそう」

「ま、その前に僕が殺すけど」

ドール。フロン。スラス。ゲイドン。アラカ。モング。ヴェイ。ナスト。ソウン。アール。アルミス。プロロン。ドッツ。

「喰え殺せや。谷に落とせ。谷に住まう原点の一匹。世界の橋の下で這う聖獣を。いでろコレ。『聖獣グングニル』」

「だ」だだだだああああああああああああああああああああああ

《召喚魔法》

呪文を唱え終わると魔法陣が展開する。直径三メートルほどの新円の陣。深緑色をした陣。これは僕の陣ではない。聖獣グングニルの陣だ。陣の色　つまりは魔力の色には相性がある。近似した色ほど相性がよく、召喚も楽に・リスクも軽減されてそのうえ相乗効果で能力も向上する。

深緑色に　緑色。
相性は良い方だ。

召喚魔法　というよりは使役魔法と言った方がいいのかな。
召喚魔法は召喚するだけ。使役魔法は文字道理　使役するのだ。
完全に支配下に置く。

聖獣グングニルは陣から這いあがってくるように出現した。
全身針金を束ねたような体躯。胸のあたりは深緑にぼやがかかったように光り、そして何より。
精神体　と言うべきか、もう一体のグングニルが重なるように存在している。

ライオンの二倍程度の大きさの聖獣。
サイズは小さめだが、能力は一級品。いや、超一級。

実体では　肉体を。

精神体では 魂を。

『喰らう』。

《聖》獣というよりは《精》獣なのだが、部類的には聖獣の領域。

だーからー、『魂を解かして喰らう獣』だ。
だから呼んだ。

ま、自動操縦だから使役もクソもないんだけど。

「イケっ、グングニル

ぶしゅうっ…

え、ちよっち、待ち。

瞬殺された。

刀で真つ二つ。一刀両断。

それこそ斬鉄。

生類憐みの令を知らんのかキミはッ！！

魔法陣と同じ。刀に犯された。

紫色の何かがグングニルの銀色の光沢を侵蝕した。

肉体は精神を宿す。精神は肉体に宿る。

必要条件。ではない。

十分条件。でもない。

必要十分条件。なのだ。

二捨一選ではない。

二捨二選なのだ。

肉体が使えなくなると

精神は続いて崩れる。

宿れなくなる。発散される。

なるほどねー。病を映すのか。

病を映し、病を移し、病を写し、病で討つ。

それが刀病。

僕はずっと不思議だった事が一つある。

刀隸にもしかり、続く刀病は当然なのだがしかり、

『どうして刀隸は隸刀ではなく刀病は病刀ではないのか？』

普通名詞を関するならば刀と言う文字は後に付くはずだ。

なのになぜ？

答えは今わかった。今更ながら 理解した。

刀隸や刀病はまるで、まるで『技の名前のようではないか』。

そう。

そうなのだ。

一本の刀 一振りの刀である前に、いや。

『その定義は技という概念から造られている』、

だから この名前。

だから、この強さ。

普通常識的に考えてオカシイと思うべきだった。

神鈴や魔剣がどうして何時も如何なる処であつてもその能力を発現

しているのか。

考えるべきだった。

刀ではない。

技術なのだ。

刀ではない。

能力なのだ。

刀である。

それ以前の問題だ。

属刀と病をかけて造られたハイブリットの刀。
同義で同等で言うところのサラブレットの刀。

ああ、なぜ僕はこんなバカなことをしていたのだろう。

阿呆は僕だ。

僕は相手から魂と肉体、両方を奪おうとしていた。

それは『間違い』だ。

奪う必要はない。

奪取すべきなのは　　刀病只一つ。

彼女は自らに病を憑かしている。

自らを人外へとする病。

自らの肉体を跳躍的に超薬的に飛躍的に向上させている病。
憑かしている。

彼女を狙うのではない。

刀を狙うのだ。

言わば本体。

部品は彼女。

彼女は肉体。

精神は刀病。

同じだ。

グングニルとも。

僕とも。

仏人とも。

レヴェルイーターとも。

第四の種族も同じ。

ならば、早速だ。

また召喚しよう。召喚し、使役する。
奪うための生物を。

アロー。ザクル。「さっさと出てこい。もう待ちくたびれた。観客
はいら立っているぞ。ほーら、餌をやる。奪っていい。蹂躪していい。
だから出てこい。そのための徴を貸与しよう。『略奪囚』』」

餌の時間だ。

「コカトリス」って食べたなら石の味がすると思います。

次なる僕の僕は『しもへ略奪囚』。

原点の一点であり、新たに創られたという世界を奪おうとした存在と謳われている。

そんな……生物。

その存在はただ奪うためだけに在り。

その存在はそれ以外を奪われた残り。

だから奪う。自らの欠落した部分を奪い返すために。

奪いつづける。

馬鹿のように。阿呆のように。おろかも愚者のように。

だが、どうして世界は奪われ去られなかったのか。

答えは　こうだ。

奪った者が返したのだ。

その鳥に。コカトリスに。

奪ったものを。

『肉体』を。

『目的』を。生きるための。

世界の略奪は防がれた。

ここまでで略奪。

そして、僕の眼の前に、地面に出現した魔法陣の色は　限りなく緑に近い赤緑。

そこから出てくるのは鳥。

鳥の形をした　　薄気味悪いアメーバのような存在。
半透明の青色。

身体の無い、肉体の無い、精神のみの存在。

そして　　その一点は、コカトリスは奪う事を止めて眠っていた。

長い長い……眠りだったのだろう。

僕はその眠りを邪魔してやった。

僕の二千体目の僕にするために。

奪った。強奪、略奪、掠奪。

そして、囚人ならぬ囚鳥といした。

身体を奪い、肉体を奪い、行きついた先は次元の違う存在。

レヴェルイーターとも、人間とも、仏人とも、第四の種族とも違う、

次元の違う存在へと昇華した。

今度こそ、全てを奪い去るために。

研いで磨いで砥いで問いで訪いで　　鋭くした。

針のように、ただ一点を。

絶対の境地に至るほど鋭い、面積を極限まで縮小して圧力をかける。

必ず貫通するように。

必ず強奪するように。

一つ上の次元の存在は　　その次元でなくては干渉出来ない。

コレ世界ノ理。

だからそれ以外はお断り。

「奪い去れ……コカトリス。くれてやるから大事に扱うな。適当に、

透明な青色の精神体にくたいの中には紫色の刀。

「もういい。消えろ」

コカトリスは僕の命令であっけなく元来た魔法陣から消え去った。

馬鹿だなー！。

魔法陣は、召喚した後残るはずはないだろう。

そのあとに残るといふ事はそれ自体に意味があるはず。
意味がなければ残らない。

ならば意味合いは一つ。

その魔法陣がコカトリスの仮の肉体だつてこと。

肉体がなければ精神は霧散するからね。

あー、残念無念の三つ子の魂百まで！。

…ちよつと意味合い違いすぎ？

「餌」の時間だぁー、お前らっ!!!

《スクエナイ魂》

『餌』に満足したらしいコカトリスは僕の言葉を聞くとそそくさと帰って行った。

まったくー、強情な奴だよ。可愛いぜっ。

つと、まだ話は終わって無かったなー。

手遅れだったけど、手は伸ばせたってところかな。

100%の融合率だったはずなのに、そうではなかった。

そうでなければこんな現象は起こり得ない。

「ナ………につ!?!おかしいよっ、こんなこと」

あー、藍理は戸惑ってるな。

まあしょうがないけれど………そこまで戸惑うものかい普通?

僕はもつと症状が酷かったけれどそこまでは取り乱さなかったヨ(笑)。

おっと、オチャラケ過ぎたら緊縛 緊迫感が無くなるねっ!!!
べ、別に決して緊縛って言葉が言いたかったから前の四行分を頭で考えたんじゃないんだからねっ!!!

彼女はキツとこちらを睨み、

「何をしたっ!?!」

と僕に聞く。

普通だね意外と。質問が。

「何も。けど、キミはコカトリスに『触れた』かい?」

ああ、自分でも意味の判らない質問をしていると自覚しているよ。ただコレは意味をなしている。次元の違う存在に触れることは出来ない。

「触れていない。触れていないから 盗られたんだっ」

「盗ったなんて人聞きの良い事を言ってくれるなよ」

なんて言ってみる。

「コレを盗ったと言えるのだろうか、いや、言えないだろうっ」

「反語表現を使っても意味は一緒だっ！あんたは私の刀を盗った、そして何をしたっ？」

「なーにも、してないよ。なーんてね。これはキミの為を思っただけの行為なんだぜ。好意と厚意と更意のある行為なんて言葉遊びにしちやあ警三流だけど、現実的には大のお人よしのする行為なんだよ！おっと、こういってまた言っちゃった」

「ぐっ、馬鹿にしてっ 「馬鹿になどしていない」」

「なら 「なら、なんだ。あのまま僕をぶち抜いて、細切れにしてどうする気だった？戻るあてもあったのか？」 ぐう」

僕は今までになく辛辣な言葉を吐きかける。

嘔吐するように。鬱憤^{うつぶん}を晴らすかのように。

どうでもいいけど鬱憤^{うつぶん}って平仮名で書くと《うっぶん》であって何か格好悪いよねっ。

関係無いけど。

「あー、話が逸れたね。今『キミの体に起きている現象』を 説明すればいいんだっけ？」

「そう、よ」

「簡単だ。キミは魂を注いだね 病病に。魔剣と知っていながら 注いだ。違うかい？」

「違うっ、私は彼女と同じ位置に立ち、彼女を救いたかっただけ」

「そして憑かしたのかい？魔剣を。魔剣の名を体にして、病病という輪状の道具を魔剣の名の元に刀状に仕上げたのかい？ソレを魂に憑かせて　融かしたのかい？まるで刀鍛冶を行うように、否。刀鍛冶を行なつて。自らの体内で」「何が『彼女と同じ位置に立ち、彼女を救いたかった《だけ》』だ。それだけでは済んでいないじゃあないか。彼女より　より高い位置に立つてどうする」「こんな事は言いたくはないけど、王道過ぎるから。言わせてもらうよ。あまりに大きすぎる力は逆に波乱を生むよ。大きすぎるものに小さき者は助けられない。優しく握っても……《潰してしまふ》」

「話を逸らすなっ」

「逸れていないよ。必要不可欠の説教入りの解説と思ってもらっていい。回折しながらの解説だけどね」

右往左往しながらの。

「そしてキミの魂で『うった』刀はキミの魂と完全に融合していた。僕はそう思っていた。けれど、そうではなかった。もしもの為を思つて、手心を加えて、僕は『コカトリス』を放つたんだ」

「もし完全に融合していなかったら、出来ていなかったら」

「それを切り離すために」

「病気に侵された部分の魂を」

「それを切り離すために」

「コカトリスを放つた」

「キミは触れたね、コカトリスに」

「だから触れていないって」

「いや、あのコカトリスは『魂』に触れることが出来る」

「つつつ！！」

「触れたらどう？キミの魂に。コカトリスのあの状態は精神体突きつめれば只の魂の状態」

「ならば次元が違つていても何であつても肉体は交差せずとも中身

ああああ」

あー、痛いだろうな。それはもう。全ての痛みを味わっているだろうな。

僕もそうだった。

僕は視線を移す。そこにはぐったりと倒れているレヴェルイーターがいた。

大量に体液を垂れ流して倒れている。

死んだのか。哀れな奴。いたたまれないな。

「砲狂鳴

ウウウアアアア……

「ルウ。アル。ヘルイ。アンバンク・エツト暗宴…静まれ」

僕の唱えた魔法でレヴェルイーターの能力？らしきものをかき消す。

明らかに声帯からでる音ではなかった。

おそらく何らかの効果が付加してあるはずだ。

ならば、音を遮る魔法を。

どうやら身体は動かせないらしい。

おしまいだな。

ルウ。アル。ゾアド。

「テサイド沈下…沈め、そして鎮め。鎮魂歌は『歌って』やらない」

「皆さんに

安らぎを。あなたに

永遠の安らぎを」

捧げよう。

「よんかい回って三回ジャンプっ、はい、これであなたも変人の仲間入り。

《メザメへの序章》

あたしがこの世界へ到達してから何年たったんだろうか。
分らない。

ただど一つ分かることがある。

自分の目的。

一度世界を壊しかけて 壊せなかった。

これはルールフォータスと同じだ。

中途半端の途中退場。

壊す。

壊す。

壊す。

壊すッ！！

もう一度、次は『別の方法』で『こつちの世界』から攻撃アブローチをかける。
遊撃…する。

何度でも、何十回でも。

一応《世界の軸を曲げる種々（レヴェル・シート）》は放ったから、
後は待つだけだろうか。

『レヴェル・エイト叭共種』を放った。

異なる八つの種族。

人とは異なる八つの種族。

人を『含めない』八つの種族。

人間に近い者として『佻人』。

あたしの眼のチカラによる新たな存在『レヴェルイーター』。

佻人と何かのハーフとして『セカンド半人』。

レヴェルイーターと何かのハーフとして『セカンド・イーター半獣』。

異種有能力を使う新たな概念として『魔法使い（ネクロ）』。

魔法使い（ネクロ）が新たな概念を持った存在として『ヴァーガイン櫃危胎』。

新化する生き物、最古の幻獣として『オールド・ノウエル古存』。

自我の出現により意思を持った器として『アード狂者』。

これらの種を放った。

種：であるから芽吹くかどうかは分からない。

先は見えない。真つ暗。

だけれども、あきらめるわけにはいかない。

更なる刻が経った。

世界を壊す礎がそろった。

代用品ではない。

代替品でもない。

替えはきかない。

世界を駆逐するために。

今この時点でもしかすると私の世界では新たな私のような存在が生まれているのかもしれない。

ハハツハハハハハハハ。

もう、何が何だか分からない。

「機能循環…

解放

…

「トランスファ転移」

そろそろ第二章……のハジマリか。

彼女は…自らを転送した。

いや、彼女の意味ではないのかもしれない。

眼の…意思なのかもしれない。

彼女のいた世界。

次元の違う場所にいるある人は言う。

「そろそろ物語も始まって登場人物は慣れてきたところかな。俺も早く介入させてほしいぜ。安心しな クレア。こっちではまだお前の次なる者は生まれていないから、安心しろ。お前はお前のしたい事をすればいい、お前が俺を殺したようにな。殺して……俺の持っていた恢這の魔眼を取り込んだようにな。俺は…、セイル=A d a m シュヴァリエはそのお前を愛しているからな」

物語は……綻び始める。

いや、コレを含めてのシナリオなのか。

それは誰にも分からない。

『セイル=A d a m シュヴァリエ』は、世界を超えて笑う。

ルールフォータスに世界破壊方法を教えたこの人物は、
全てを見通すように。
全てを見透かすように。

笑う。

この人は……全てを混濁させる者。

アダム。

そして、

エウア。

彼女は何処にいるのだろうか。

ルールフォータスは聞いた。

クレアに。

『エウアは元気か』と。

その意味は……一体。

「クレア、エウアはいつもお前のそばにいる。せいぜい魔眼に侵され
ないように……気を付ける。だってお前は相性がよさそうだ。ああ、
それと……」

アダムは絶対に聞こえないと知っていても言い続ける。

「『絶対にその世界で八つ以上の種族を誕生させてはいけない』ぞ。
大変なことになる」

まあ、俺には関係ないがな」

では、あなたに安らぎを。

世界に平穏を。

「よんかい回って三回ジャンプっ、はい、これであなたも変人の仲間入り。」

どうも。

連日投稿すいません。

水口 秋です。

最近おもしろいと思った漫画本（唐突ですが）があります。

「ブレイクブイド」と「ひゃっ」ですっ。

「ブレイ ブレイド」はロボットものなんですけど漫画のくせに漫画以上の迫力（矛盾）感があってもものすごく引き込まれます。

未完で九巻でています。

「やっこ」はまだ少ししか見ていないんですけど、ワイワイ感が出っつごい味出していて面白いです。絵はライトノベルのイラストレーターもしたことがある作者さんなので躍動感バリバリです。

こっちも未完で五巻でてるはずですよ。

あー、なんだか宣伝しちゃってしちゃいましたよ。すいません。

と言う事で少し自分の書いてる事について話します。

ハイ。

何もありませんでした。

えーと、何気にまだ一日も経っていないんですよ、コレ。

まだ禁書目の方が時間の流れは速いですよねっ。

でも、一応魔法使いサン視点ではかなり時間は立っているはずですよ。

ハイ、

ではーまた。

えっと、あと少し小説の話をしてもいいですか？

ハイッ、では

！
！
なんか今回の話は設定集みたいでぶっちやけ書きにくかったッ

ハイ、すいません。只の愚痴でした！。
ではまた十全なる巡り合わせにご期待を。

『オーブニング』は突然にして…。

《ヨクアル独白》

オーブニングは突然にして王道であり、ありありありありああああああああ。

夢を見た。闇より暗い、『僕』に喰らい憑いてくる嫌な夢。

僕は超一流の魔法使いになる筈の家系の出だった。

掛け値無しで、だ。

だが、何処でそのボタンを掛け違えたのだろうか。僕は超優等生という肩書きを「持つ」はずだった学生生活を超劣等生としての肩書きを「背負って」過ごした。

厭ではなかった。嘘でも虚言でもない。

両方同じ表現だが絶対的な違いがある。

それは数。それは文字数。それがどうした？と誰もが言うだろう。

だが、その所為で僕は超劣等生となった。

さきほど、何処でボタンを掛け違ったのか分からないと言ったが訂正する。何処でボタンを掛け違ったのかは検討はついている。だが、何処のボタンを掛け違ったのかは…分からない。

超劣等生の僕には誰も…近づいては来なかった。僕が「緑」を「背負って」いるからだ。表現などではない。事実背負っているのだ。持つはずだった「紫」を「塗りつぶし」てその分も併せて「緑」を背負っている。比喻などではない…譬喩などではない。「緑」は僕の体内のどこかに在る。未確認だが確認しなくても感じる。

突然現れた魔法使ヒの「ソトイロミドリ」は別世界の人間であるに

も関わらず、魔法の概念を「捉えた」。本来なら「拘われ」ないのに。

魔法使とはあり得ることが「ない」世界の色を持っていた。それは……。

てーなかんじの夢を観てた。

いや、ほぼ真実ナンだけどまー愚鈍な空想も多少孕んでたような気がした：ような気がするからまあいいや。

夢オチのさらに夢オチ。ハイレベルな劣化をもたらす要因に成りかねないな……。

ハレルヤ、ハレルヤ。

あー、はれるやー。

いや、なんとなく。ね。

ココで一つ新事実。第二章になって。

彼と彼女と赤皿藍理と苛納柁維佑は僕が殺しました。なんだか後々物語が混雑としてきそうなので。

第一章ラスト格好良く締めたけど、その後なんか「あ、これで僕以外の主要登場人物が死んだら僕から視点になるんじゃないやねッ？」って思っただけ。

テヘっ。

なので第二章は僕視点の語りになるんでそこヨロシク。

けどさー、断言するけど。

『彼、彼女、苛納柁維佑、赤皿藍理が死んだって特に世界に変化は起きないと思うんだよ。』

いや、コレマジで。

なぜならさ。

『一人、若しくは数人程度で世界をどうこうなんてのは絶対に不可能だろう。』

捻くれた考え方をせず普通に考えたら。

だってそうだろ。クレアだって世界を壊せなかったじゃん。

僕たちから記憶を奪い去って世界を去った。

それだけ。

あれだけのことをして、あれだけの大仰な事をしてそれだけ。

なら別にいいじゃんツ。

どうせ後釜に誰かが入るよ。

彼らは普通だ。彼らが各個人のことを異常と捉えようが普通と捉えようが、普通の部類だ。

何て言ったって、自分の事がどうしたって分かっちゃってるから。定義出来ている。

どう定義するかは知らないが、無意識的にはしているはずだ。人がどうして走るのか。

どうして立っていられるのか。

それは人体の筋肉の使い方次第だが、そんなのは自分の中で完結する概念だろー。

それとおんなじ。

テイギデキルテイドノイジヨウハフツウダ。だからふつう。

普通でも理解できるから普通。理解できるって事は乖離出来てないって事。

普通なら良いじゃん。

この言葉は

…、

辛辣かい？

厳密かい？

方便かい？

想像かい？

妄想かい？

適当かい？

適度かい？

普通かい？

異常かい？

遊戯かい？

悪戯かい？

常識かい？

阿呆かい？

馬鹿かい？

利口かい？

詭弁かい？

エゴかい？

低能かい？

無能かい？

……………。

違うかい？

違うないだろう。

いや、違うないさ。

反語法も使う価値もない。

掛け値なく。

この僕はその代わり異常だ。

自分のことを『理解さえ出来ていない』分、異常だ。

理解できていないと言うことは同時に乖離出来ているってこと。

だから普通には理解出来ない。理解出来ないのならそれはもう離間

しており、普通からすると理外の理でしか無いだろう。ああ、勘違

いしないだね。普通から異常は視えない底なし沼かもしれないが、

異常から普通は底が筒抜けに視える河原でしかないから。

話が逸れたね。

つまり言いたいことは突き詰めれば大部分の普通は成すべき事を胸にしまっているが、ソレは別の人間であっても構わないって事。

…あん？

そんな事あの文章から読みとれないって…。

はあ。しっかり読んだ、内容判別ちゃんと出来た？

したなら解るだろう。

それは普通だから理解できないんだよー。

阿呆だなー。

分かり易く言えばこれはレヴェルなんだよね。

普通も異常も一応の上限はLv・100だが、その上限の上限を指そうとするヤツが偶にいるんだねこれが。それも意識的に無意識に。そして、ソイツがイチレヴェルでも越えてしまつと、ソイツは異常。

Lv・101

でも。

Lv・1200

でも。

後戻りは不可。

もう孵化しちゃってるから。

成虫が幼虫に戻ることは無理だろう。

蝉せみが蛹かみに戻るのは無理だろう。

そう言った意味での異常なんだよー。

あー、異常って言葉がゲシュタルト崩壊してるなー。

だから殺してもいいじゃんっ。

なんだか言い訳みたいになっただけど、そう言うこと。

何奴も抵抗は皆無だったよー。

なんせ空間を割ったからね。

ガラスのグラスに蛙を入れてガラスが蛙に降り注ぐように割ったら中の蛙はどうなる？

下手すりゃあ死んじゃうんじゃないかな。

ソレとヤリカタは同じ。

神鈴《乃巧》使って。

神鈴の中でも秘蔵っ子の神鈴。伝説がないことが伝説の神鈴。

ソレを使った。

出し惜しみはしない。

湯水のように…使い切る。

そして地均しに乃巧で戻す。

完璧だ。

じゃあアイツを今度こそ見つけるために肩慣らしといきましょうか。

んじゃまー、そったら。

《レヴェルイーターの絶滅》でも。

キイイイン。

んあ？なんじゃ、こりゃ…あああッ！！！！！！

眼前3メートルの所に魔法陣が無から構築されたようにみえた。陣がひとりで出来る。

音もなく。

そうしているうち、次の瞬間。
数十の同系統…否。「同じ魔法」が連射された。

僕の記憶ではその魔法名は……

「支配」
「レイイン」

クレイ「Adam」シユヴァリエの所有する魔禁法と言う名のシン
グラの魔法。

行き成り本命の登場…で、す、か。

ここいらで出しときマスカー。

天矛の……
テムム

《夢景》
ゆめけい。

第一章であのレヴェルイーターが言っていた魔剣と天矛…そして神
鈴。

区別は曖昧だ。

だが、これだけは言える。

天矛には力が宿る。力強い力。

夢景も同等価。

僕はこれで。

「神。」
「」

を。

殺した。

それは白い、ただ真っ白い棒だった。

さあ、ながいー、ながーい、なーがい、-ながい。オープニングも幕を下ろそう。

さー、皆で一緒にー。

皆さまへ。更なる世界への導きを。

え、違うかった？

もしかして安らぎをって思った？思っちゃったわけえ？

テンプレートは飽き飽きだよ。

チャオさちやうなひってしちやおー（寒っ）。

僕はこの棒を振るった。

それだけで僕の周りは夢しるい景けしきになった。

オープニングはここまでかな。

幕は降り切ったね。銀幕が。

さあ始めようか。

世界の真実をむき出しにするために。孕んだ醜悪を偽善を欺瞞を。

僕は戦うッ（キリッ！！）

てな感じでぎゃははっと一度笑っておこうかな。

まずは孕んだ醜悪を溢すのだー。

さあ狂おうか。

『オープニング』は突然にして…。(後書き)

特に説くには無いですが。

一つ言わせて下さい。

私は　　っ、どってんばったんがえしが嫌いだあ

！……！！

はい、嘘ですね。

と言うわけで第二章と言うことです。

実は章設定なんてする気は全くなかったんですけど…。

なんだか小説内で書きちゃって、第二章とか…。

だから創りましたハイ。

では、第二章も宜しく願いまーす。

『ポロリ』もあるよっ。ロリッ娘の。ポロリだけに…。

《彼ト彼女》

彼には独自の律があった。それは本当に一個人にしか適応できないであろう自意識の塊。

書き換え不可能で置き換え不可能の思考方法。

名前を失って身に付けた処世術だった。

と言っても　名前を失ったことを初めから知っていたのではない。

彼女との邂逅で、その事実を会得した。

偶然だっただろう、突然だっただろう。

体の芯まで滞るほど寒い日の事だった。ジンジンと指先・首元の血行がイイところがるのが分かった。

た。血流の熱と外気の冷が冷戦を起こして異常な痛みを発している。ちくちくちくちくと。

彼は思う。どうして俺はここに立ってるんだらうと。それは仕方がない。知らないから。彼の脳の海馬は空っぽだった。記憶としての記録は存在するが、記憶としての記憶は存在しない。つまりは人と関わりなどのエピソードの記憶は無い…　と言う事。

雪がはらりと降る。元々外気温が異常数値を示すほど低く、耳にはもう感覚が残っていないほど寒かったのに、ここで雪が降る。関係無い。その程度の寒さが上乘せされても関係ない。

彼は思う。彼は感じる。

頭に、髪に、鼻に、頬に、肩に、靴に、雪は舞い降りる。舞い落ちる。だがその降りた雪は短命の命を更に熱によって削ってジワリと熔ける。

一步、地面を踏む。単なる単純な体重移動、それだけで冷たい冷氣

は空気の密度の変化によって微風となって彼の体温を執拗に蝕む。

はあ。そう彼は息を吐く。その口からでた二酸化炭素を含んだ吐息は一瞬で温度が低下し、白く曇る。

もう一步、踏み込む。

記憶を探る。記録としか残留していない記憶を。

ジャリ、ジャリ、と頭が変な音を立てるような気さえする。何も考えられなかった。その原因を知る由もないが。断片を掴む。決して放さないように。記憶の断片。家族との…記憶。温かい、この身に染み込む寒さを除外できるほど温かい記憶を。

「 さつさとしたくしなさーいっ」この語尾を微妙に伸ばす言い方は…。母が言った。始めの方の音が潰れていて思い出せない。

「 凄じじゃないか 。 。 うれしいぞ」少し気取った言い方をする男らしいのは…。父が言った。後に続く言葉が分からない。これは何だ。

彼は困惑する。

「 おにーちゃん。ここってどうやってするのー？」幼くも確りとした甘い声。女の子らしいのは…。妹が言った。「おにーちゃん」の前の言葉が分からない。普通なら何かの名詞が来るはずならコレは…、これらは俺に向かって言われているのか。

潰れて、掠れて、無音の部分は…俺の名前？いやいや、そんなはずはない。

彼の困惑は疑惑に変わって疑念となる。だが、それらを証明する方法は一切合財存在しないことを彼は心では理解している。頭ではな

く、心で。

かあつと寒さを打ち消すほど熱い、焦りを具現化したような熱が身体から込上げる。「何とかしなければ」と何もならない状況で彼は。

ぎゅ。

ぎゅ。

ぎゅ。

ぎゅぎゅ。

ぎゅぎゅぎゅ。

はあつ。一気に肺にため込んだ熱い溶岩のような息を吐く。

ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ。

数歩踏み出して止まる。

立ち止まる。

自分が何をしているのか…自分で理解できなかったから。

「…俺は、一体」

しかし、何か引っかかる。かすかな凸がある。突起が平面に一点だけ存在する。

それが一体何なのか。寒さが指先を刺す。熱を保つために拳をぎゅと握る。

一度、はあーつ。つとゆっくり長く吐きつける。

一步。二歩。続く三歩。その間隙を埋めるように四歩。さらに五、六、七、八と歩みを進め、さらには歩みは強歩に、そして走行へと疾走へと変わる。恐竜の時代から今の時代への進化の過程を進むように、徐々に徐々にその速度は上がる。

ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ…

つつつつたたたたた

!!!

たつたつたつた

何が何だか知らないうちに走った。無知の知なんて関係ない。知らない事を知るなんていう矛盾はいらない。まるでそんな考えがあるようだった。何か成さねばならない。だがその目的が一見では読めなくて、走る。走って走って走って　その考えから逃れるために必死で。

はあっはあっはあっ、はあっ、はあっ！！
はっはっはっはっはっはっ
！！はっはっはっはっはっはっ
！！

肺の空気を必死で循環させて酸素と二酸化炭素の需要と供給を対等にする。天秤にかけてもどちらか一方に傾かないように。傾斜をなくすために。

走った。周りの景色なんて見ずに彼は走る。走って走って目的地なんて無く、^{あて}当なんて無いのに走って走る。

何処へ向かうのさえも定かではない。だが、彼の表情は一転してそれがどうしたといったようすだった。

恐らく彼は光を求めていたのだろう。光の　在る場所へ。辿り着きたいと、その道程は分からないが。希望の光。そこには到底に辿り着けはしないだろうと、彼は皮肉交じりに唇の端をゆがめる。

幾許かの時が過ぎた。外は今まで以上に冷たくなって、時間まで凍結してしまうかと思うほど。時間はもう夜の帳が降り去ってしまった、辺りは月明かり以外の明かりはない、黒色の世界となった。

んはあっ、はああっ、はあ、はあ、はー。

途中で数回転んだのか身体の所々に擦り傷が見受けられる。一体何がしたいのか分からない。

両膝に手を付き、高まった鼓動を落ち着かせる。ドクンドクンと血液の流れを創り出す臓器の機能を多少休止させようとする。涙が眼

の端から滲み、伝う。寒さとつらさが一気に押し寄せてくる。胸倉を掴まれているような不快感に顔を歪ませる。もはや自問自答のし過ぎで思考回路が摩耗して、痺れて、てんやわんやになるのが分かった。

カツッ。

カツッ。

カツッ。

カツッ

。

コンクリートの堅さがヒールの高音を反響させるのが聞こえる。その音は寒さと混じり合って更に彼の鼓膜を瞬間的に震わす。その足音は目の前で止まる。

その音源以外の立てる音は鈍く、耳にははつきりと這入って来なかった。と言うよりは、もはやそれ以外の音は無かった。だがそれが常識のように彼の頭は拒絶していた。多分、コレが彼自身が彼に与える律の一つ目だったのだろうか。

だが、彼は膝に視覚を落として視点を上げようとしなない。

まるで、聖母マリアの前にいるように。声をかけられるまで顔を上げないように。

ダークグレイの世界 鈍色の世界で固まっているように。古いブリキのように。

落ち着けよっ、俺っ。

彼の顔はそう言っている。

鈍色の世界が剥がれて透明の、自らの立ち位置さえ透明の意味不明の世界が彼自身に訪れた。

彼と彼女が出会った瞬間。彼女と彼が出会った瞬間。それは偶然のような必然のような当然のような突然のような邂逅だった。

「……そう、俺と『同じ』だろうな。俺たちは、俺とキミは多分、絶対に……」

そして、彼と彼女は互いに互いを証明できる事を……した。

一人だけでは、無謀。

彼だけでは無理難題。彼女だけでは机上の空論。

一人だけでは、悪魔の証明。

だが、二人なら。何も知らないお互いはお互いを証明できるのではないのか。

いや、彼女と彼は確信している。互いが互いの代替者オルタナティブではない、互いに《アイデンティ》を持つのだと。そしてドコか懐旧の情かきたてると。

「名無しの」「名の無い」「人間」「

「だね。やっと出会えた」

「俺はキミを探そうとはしていなかったけど」

「あたしは捜したよ。捜して、探して、偶然……出会った。キミがすごいスピードで向こうからやってきて」

「俺はただ走ってただけだった」

「だったら運命だよ」

「天の采配ってやつか」
「そうだね」
「そうだったらいいな」
「じゃあ…」
「あー、そうだな」
「これから」「よろしく」

ここから、名無しの彼と名の無い彼女は実質的に始まった。

「……………」
「……………」

どちらが彼でどちらが彼女か。区別が必要。
だが、線引きは必要悪だろう。
もう、この時点で彼らは運命共同体となった。

彼は初めて視点をあげ、彼女を見据える。
涙を流した後の水分が潤沢とした眼ではうまく焦点が合わせにくかつたが、それでも見据える。
長い黒髪の女、黒の瞳、対照的に白い肌、赤色を基調としたドレスに似たとてもじゃないがこんな寒い日には着れないような服。その服は身に纏うように少しピッタリとしている。そして、赤色の高い、高い、ハイヒール。

上半身を直立して、視線を合わせる。彼女と。
スツと白い手を胸元辺りまで持ち上げ、彼に向けて差し出す。
彼はその左手を包み込むように優しく左手で握る。

そう、彼と彼女は。

俺と彼女はここから始まった。

…ちよつち物思いに耽りすぎたな。

てゆうかなんじやいなここは？

徹頭徹尾意味分からん。

てゆうかなんじやいなここは？

大事な事だから二回言ってみたりしたり。

あー、夏だつてんのにな。てゆうか、今日だよ。まだ一日も経つてなかつたりして。

あー、アイス食べてーな。

なんだか知らないところで知らない奴に死んだことにされた気がしたんだけど、まーいいか。

それよりも、やらなきやいけないことはここから脱出だよな。

この又バ又バと納豆のように身体に粘りついてくるような雰囲気的空間なんて御免だ。

お役目も御免だろう。一生俺には。

まずはー、彼女を探さなきゃな。

黒髪自称美少女のスケブラ彼女を。

あー、破けてたらしいな。

ポロリもあるよっ！！いやっ、どこの部分がと言わないぜっ！！！！！！！！

焦ってエクスクラメーションマーク大量に使っちゃった。

いやいや、期待してないから。

もしかすると…なんてつい本気で考えて妄想したりしてないからっ！！

ふー、あわてちまったぜ。

べつに触手で胸とか強調するように締めあげられて、触手から出る液体で服だけ溶かされて「キヤー助けてー」とかってな感じのシ

ユチュエーションにバツタリ運命的に超偶然に超超超超超偶然に偶然の132乗ぐらい偶然でついついそのあられもない姿を見たりしたかったりしないからっ。

それだけ期待してるわけじゃないからなっ。何回も念を押すようだけれど。

もう何が何だか分からねーからあの陸上競技場で死んだ俺に話しかけてきた気持ち悪い奴の死に顔でも思い浮かべよっつと。……………才エ。

あー、アイス食べてー。いや唐突だな。

けど、気分はスイカーだよな。

イカバーの種だけどこかに売ってないかなー。あれおいしいんだよな。何故か。

冷やしてポリポリ齧りたいな。

イチゴの蜜のかかったかき氷の上に種降りかけたら一緒じゃないかな。

こんどやってみよっつと。

さー、ポロ…リじゃなくて彼女を見つけに行こうか。

「腹」にたまった脂肪を燃焼させよう。

運命を敬え。

運命を享受せよ。

名前を、…取り戻せ。

《承》

…声が、響く。この空間で目覚めてからずっと響く。この四つの言葉が呪いのように、暗示のように轟々と鳴り響く。当然、俺の頭の中だけでだが。

名前を、…取り戻せ。取り戻せ。り戻せ。戻せ。せ。…。

この言葉だけに意識を傾ける。誰の声とも知れない、何の根拠も信用もないこの声に。

男とも女とも判別も区別ものつかない声。ただ中性。もしくは文字なのかもしれない。文字だか《音》がない。文字だから《音》にならない。

だったら、コレは何だ。

分からない。だから、分からない。

自分が、こんな事で分からなくなる。理解出来なくなる。不可能形。自分が俄然恐ろしくなる。考える韋になれないな。

声に出す。意味がないと知ってても。

「わかんねーよ」

儂く音は霧散した。

あばばば。まーしょうがないな。考えても無駄だから、この件は後回し。その内何等かの応答があるだろ。

相変わらず気持ち悪いこの空間を歩く。

べちゅあべちゅあと靴と地面的な何かから効果音が鳴る。

てゅーか何なの…。この周囲に停滞している臭気は。胃液とかその類の内蔵系の分泌液みたいな劣悪な臭いがプンプンと……。くせーくせー。

それにこの眼の前に繰り広げられている悲惨な状況。肉の壁がブチブチと縦横に切れて凹んで壁から汁がボチヨボチヨダラダラーと垂れて床に水溜り…。ではなく汁溜りが出来ている。そのダマリにも埃か何かが浮いて言葉にしがたい状態になっているし。

それにしても何処まで続くんだ、この道は。どんどん詰まなくなつて来るぞー。

あーるぴーじーとかならエンカウントするだろ、エネミーとかと。初っ端からボス級とのエンカだったりして。洒落になんねえ。

今更ながらこの内蔵の内部構造みたいな空間は一体どこまで続いているんだ。まず、ここはどこ。

あの翼のレヴェルイーターが創り出した空間は俺が所有権をもぎ取ったから、今ここからでもソコへ移動できるはずだ。

空間から空間、創造されたモノからモノへの移動は点ではない。面でもなく、線なのだ。

繋がりが必要。一種の連鎖と言ってもいい。

だが、その条件は満たしている。

状況は五里霧中だが条件は順風満帆。
確実に移動できるはずだ。

…だが、出来ないな。

俺の周囲、もしくは俺自身に何の変化も起きない。

「一体どうなってるんだ？つまりコレは…」

つまりコレは、途中で線が断線されるような事象がある。それとも

『終着点となる空間自体の存在が無い』
かだ。

くそー。完全に行き詰ったな。どうしようか。

こんな行き詰った状況こそ、打破するためのインセンティブは必要だと我ながら思うんだけどなー。

まあ、その程度の誘因や刺激は在って無いものだろう。

「どーすつかあ」

…。
『虚鯨』を使ってもいいけど、『対象』が今ここには無いからな…。
…。
想像による能力の創造はそう難儀なことじゃないけれど、できることなら今は使いたくないんだけど。

「まーここまで詰んでたら、もう起死回生の一手を無理やりにも打つしかないか…」

それならば、最善の切り札はコレしかありえないだろう。

論外で、異存はない。

卑怯だと罵られるかもしれないけど、俺ってば結構エムっぽい一面もあるから容易に享受しようか。

俺は歩いている空間の壁に右手の手の平を触れさせた。

内蔵みたいにグニグニとして、少々手が壁に埋もれた。押せばもう少し埋もれるだろうけど、目的はそんなことではないからそこで力を込めるのを止める。肌色と赤色が混じり合って大理石技法で作ったような肉みたいな壁は微小の熱を持っていた。

この世界には、人間も、仏人も、レヴェルイーターも、全ての物質も、それぞれのおのおの各個体に何らかの『性質』を持っている。

固有の性質。

数値化できる。定数化できる。

これらは温度、圧力に依存するといわれている。つまり、『この世界に物質として存在していること自体がこの条件を満たしているのだ』。

例を挙げよう　密度・弾性率・電気伝導率・比熱……エトセトラ。

無数に存在する。人はそれらを知っている。

音叉の共鳴するのには固有振動数が必要だ。

音の速さは　光の速さは　、これらも性質。

こういうのを物質定数というんだけど……。

物質定数は歪と応力の比で表わす事が出来る数値だ。

ならば、人間ではない俺は。

仏人の俺は。

この枠を超えられる可能性を秘めているはずだ。

いや、秘めている。

コンプレイアンス

この物質定数を自由に變形する事が許容されれば、俺はこの空間から脱出の糸口を見出せる。

あいにくだけどその手立てはある。手のうちに。

ふうー。息を一度大きく吸って吐く。

テンションが少し上がり、多少の高揚感が精神を満たそうとしているのが感覚として掴める。

興奮が…伝達されてきたのだ。

一般に、興奮⇨アドレナリンと誤っているだろうが、それは少し違う。

アドレナリンの前駆物質としてノルアドレナリンという脳の分泌物質があるのだ。

ノルエピネフリンとも互換できる。

そして、アドレナリンが脳から染み出るのが分かる。

鼻の奥に、鼻の嗅覚の神経がアドレナリンの匂いのようなものを感じ取るのが分かる。

言葉では表現できない、あの匂い。

長距離や短距離、はたまた少し運動していて辛いと思ったあたりでふと鼻が嗅ぐその匂い。

当然だ。こうなるのも。

物質定数を曲げるといふ事は、世界を曲げると同義。等価。同等。これを使うにもリスクがある。

自らの物質定数を曲げてしまう危険性を孕む。

一歩歩くと細胞の結合係数が極端に低くなって崩れる体に。

脳が脳として機能しなくなり、体が体として機能しなくなる体に。

皮膚の色素の色合いが変わったり。

骨の密度　骨密度が変化したり。

そんな体になるのかもしれない。

まあそんな要素は予想せず他所に置いておいてさっさと使っちゃお

う。

俺は『王胎』^{おうたい}を左手で握った。

もしかすると本当に手が滑ってヤツチャツタになるかも…。

その時は文字通り、皮膚の摩擦係数を零にして『手が滑る』を体現させてみようかな。

ま、んなあこうたあどおだあつてえいいい。

右手を壁に付けたまま　　つぶやく。

「王胎　　…」

「解析　　開始」

一　間置く。

「解析　　終了」

このまさしく肉のような壁は肉であり、細胞で構築されていた。
つまりは、生きている。生物の腹の中。

「細胞の結合係数を最低辺まで落とす　　完了」

「各器官の活動を最低限に　　完了」

「抑止…　　完了」

王胎を跡形もなく左手から消す。

右手の触れている壁が突如　　崩れた。

ポロポロに。

ぐしゃぐしゃに。

「インド」人の額のポツンってな点って何かなかな…。 (前書き)

遅くなりました！。

「インド」「人の額のポツンってな点って何かなかな…」。

《合流開始》

この世には、接触してはいけない化け物が太古の昔から存在する。

城壁の如く防御を保有し、隕石の如く攻撃を行使してくる「ドラゴン」であったり。

究極の英知を司り、接触したものを必ず掌握するという「精霊」であったり。

神を殺戮した生物の魂を生きたまま四つに引き裂いて生まれた「四霊」であったり。

世界の創造主が世界を創るために柱としたと言われる「五竜」であったり。

生きた生物にとり憑き、生きた状態で死んでいる「アンデット」であったり。

人間とは似て異なる一線を画する存在の「亜人」や「獣人」であったり。

これらの存在が人間と何らかの手段で交わった「半人半獣」であったり。

全ての魂を監視する為に創造主に創られた次元の異なる異質な存在

の「神」や「悪魔」であつたり。

己の肉体に生物を閉じ込めその魂を時々刻々と変化させる異形な「八部衆」であつたり。

その存在は様々である。様々であるがゆえに人は気付かず、徐々に侵蝕されつつある。

そしてもう一つ。

壊された空間は必ず無に還るとは限らない。空間は領域と言ふ限度はあつてもその容量は際限のないものである。その辺のレヴエリイターはその際限のない容量に耐えきれないために態々制限をかけていた。そして、この世界を平面と捉え、定義するならば

全ての空間は全て、多岐にわたつて捻じれて曲がつて潜つて隠れて飛んで狭まつて広がつて…繋がつている。

ミュートルだ。

想像してほしい。水槽に溜まつた一定量の水を。平面的ではないが、理屈としては正しい。

水の中で袋を広げると、当然ながら水が入ってくる。そして、その袋の口を縛つて水から取り出すと袋に入った分の水が無くなった量だけ穴を埋める。これは物理現象としては習うまでもない非常に一般的な事だ。

これと同じことが空間にも言える。繋がりの一部が無くなると、ソレを埋めようと左右前後、四方八方の空間が穴の部分に押し寄せ。そして、壊れた空間の要素となるものがたまにだが別の空間に入つてしまう事がある。イレギュラーなことだが、事実として存在する。これが、今俺が置かれている状況。

そして、今ここにいる理由。

考えてみた。どうしてこんな肉まみれの空間にいるのか。

始めは別の空間に落ちたのだろう。そして閉じ込められた。先に挙げた「八部衆」に。

「インド」人の額のポツンってな点って何かなかな…。 (後書き)

すいません。

テストがそろそろです。

ちよつと二週間ほどアップできないです。

一応、次話アバンを書きました。
では。

『運命』的出会いって確率にすると一体どれくらいなんだろう。千の階乗だった

《続・承》

痕跡を追う事、約数十分。明らかに今までとは違う様子となった肉の空間は、大きな口を開いて俺を迎えた。

あれから、しゃらくさくなつたので王胎で周りの壁をありつただけの範囲で崩した。すると、一つの方向に真っ青の肉の壁を発見した。

そこは大きな空洞になっており、そこから中の様子を察知することは不可能だった。

そして、その口の前。破壊痕はこの口にもある。右側が大きく削げている。断面からはたるんだ神経のようなものが見える。

舌の根元に溜まった粘質のつばをグツと飲み込み、覚悟を決めて一歩踏み出す。

中に入ると、そこには彼女とあの二人組がいた。

俺は愕然とした。

べつに彼女は触手に蹂躪されてもいなかっただし裸でもなかつたし服が溶けているわけでもなくキヤーと叫んでいるわけでもなく恥ずかしがっているわけでもなく二人組は喋ることもなく敵対することもなくこつちを見ることもなく彼女と二人組は、

「……………おい、死んでんじゃあねえかよ」

手足を肉の壁に埋め込まれ、胴体の重さで前にうつむき、生気の全く籠っていない顔に焦点の合っていない瞳に何処かを空空漠漠と無限に映していた。

…おい。

……おい。

……おいつ。

「がああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

死んでいる。

事実を噛締め、脳で砕く。

先ほどまでの多少の高揚感と緊張と期待が混じり合い、汚濁の感情をブレンドする。

思考する。

彼女たちが、彼女が死んでいない確率を。

眼の前の事象を無視して。

あー、糞。

確定要素を度外視しすぎて全く現実味の無い答えに辿り着いた。振り払う。

その考えを。払拭する。

もう一度、確認する。

こっちの焦点が合わなくなりそうだ。眼が、目に霽がかかる。何かが頬を伝う。目尻から流れ出るソレは。

とっても悲しい物質で構成されていると、この時俺は思った。

「ああ、これが…悲しいってこと」

涙が唇の端に触れ、上唇と下唇の間に潜り込み、濡らす。

雪の降るあの日。

《俺は彼女を守ると心に誓った。》

《俺は彼女とともに生きると心に刻んだ。》

《俺は彼女と名を取り戻すと心に決めた。》

《俺は彼女と

》。

そして、俺は『思い出す』。

『運命を敬え。 運命を享受せよ。』

という頭に反響していたあの言葉を。

この事なのか…、だったら俺に語りかけたのは…誰。

運命を、変えることは出来ない。

言葉が流れる。頭を直撃するような頭痛が響く。

従え。それがお前と我の契約だろう。

お、お前は…

知識は消失されているのかも知れんが、本能は記録してあるはずだ。

ああ、あの時俺が彼女とともに創った擬似的存在であった者、なか？

そうだ、お前とアレはあの小童であるレヴェルイーターを消すためだけに幻影を創った。だが、お前の中に本当の我はいる。アレは自分の能力で創ったと言ったが、『そんなことは絶対にあり得ない』。

長い言葉をしゃべるたびに頭にギンツときつい衝撃が走る。

なぜなら、我は生まれて一瞬も肉体をもったことはない。い

つも乗り移っていた。アレはお前の本質を無意識と意識の境界で理解していたのだ。

…第、六天。

そうだ。そしてお前は、お前の名前は××、それがお前の名前だ。

っがああ、今なんて言いやがった？

ふむ、やはりまだロックがかかっているな。これでは道理が通らない…、おい人間。

俺は仏人だ。

我から観たら人間も仏人も大して変わらん、異能か否かの違いだ。

何のようだ。

お前に名前を与えてやる。

どうして、

ふん、我は幾重もの死を体験した。そして知った。人間の精神のもろさに。今の貴様は水の膜のように今にも死んでしまいそうではないか。我はこの肉体が気に入っている。だから、死なれては困る。

俺は死ぬ気なんて…、

嘘をつけ。アレの死体を目の当たりにしてお前は創造能力をオリジナルコンジエクター使って何をしようとした。それは貴様自身が一番身に試みて知っているだろうに。

だから名前をやる。お前とアレを繋ぎ止めている楔と鎖のうち一つは名前だ。これで多少はマシになるはずだ。

俺たちはそんな薄情な関係ではない。

否定できるか？貴様らが関係を結ぶ理由は自己の本質名前を自らの魂の核に帰還させること、そうではなかったのか。だから自らの利害の為にアレを守ると決めたのではないのか。

違っっ！！！

強く否定することは反面では理解しているという事だ。

調子に乗るなよっ、六番目が！！

私の事が言えるのか、お前に。《リアルゼロ》のお前に。

リアルゼロ？それは 「よお、ロク。久しぶりだなあ。あたしのことまだ覚えているよな。あたしだけがお前を見抜く事が出来る同類だっつて」

脳内での会話に集中していると、背後から声が掛けられた。

『セカンドか、貴君とは一生会いたくはないのだが』

六番目は俺だけじゃない。この空間に存在する全ての生物に語りかけた。

「今はその《イマジナリー》に寄生しているってことかあ？はっ、趣味の悪いいやつだな相変わらず。まったく吐き気がする。おいっ、イマジナリー」

今の会話からすると俺がその《イマジナリー》なのだろう、

「なんだ？」

「今だけだ。《ロク》と変われ」
セカンドと言われたソイツは姿かたちが無い。

たのもう。一度だけ、今しがたその体を借り受けたい。

…承知した。

断る理由もない。今の、俺には。

そこから俺の意識は途切れた。
糸が切れるように、プツリと。

意識が戻ったときには六番目もセカンドも、俺が感じる中ではいなくなっていた。

一つだけ、変わったことがある。
周りは肉に囲まれていた筈なのに、今は見渡す限りの平面となっている。

当然、死体も。六番目がアレと呼んでいた彼女も。

ギリツと奥歯をくいしばる。

もう、行き詰まりだ。

行き止まりでさえない。

戻れない。

前も後ろも詰まっでいて。

…クソツ!!

『運命』的出会いって確率にすると一体どれくらいなんだろ。千の階乗だった
すいません。

とても遅れてしまっていました。

水口です。

少々内容がアレですが頑張っていきたいと心より思っています。
では。

三月は西尾サンの新作が出る様子です。

するがデ ル。

楽しみですねー。

ではこちらで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2319o/>

名の無い彼と名無しの彼女

2011年9月23日19時18分発行